

— 千葉県市原市 —

ご ざ め せん げん じん じゃ こ ふん
御 薮 目 浅 間 神 社 古 墳

1 9 8 7 ・ 3

財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は房総半島の中央部に位置し、東京湾に面することから山や海の幸に恵まれ、先史より多くの人々が生活を営んでまいりました。これらの歴史を裏付けるように市内には、貝塚や古墳等の他にも多数の遺跡が分布しております。また、奈良時代には惣社地区に上総国分僧寺・尼寺が建立され、村上地区には上総国府が設けられたと推定され、市原市はかつて、上総の国の中心地として栄えておりました。

近年は、市原市が自然環境に恵まれていることから、臨海工業地帯の誘地や首都圏のベッドタウンとして開発が進み、『活力に満ちた豊かなまち市原』をスローガンに、市政施行以来25年を迎え、一層の飛躍を図ろうとしております。ここに報告します御蔭目浅間神社古墳は、市内の交通網整備の一環として、国分寺台地区と五井駅東口を結ぶ市道建設に伴う埋蔵文化財の調査報告書であります。

調査の結果、市内ではめずらしい養老川河口の低地に所在する、帆立貝式古墳であることが明らかとなり、埴輪を多数出土し、この蔭目地区のみならず市原市の歴史を解明するうえで貴重な資料が得られました。

本報告書が学術資料として利用されることばかりでなく、多くの市民の方々に教育資料として、あるいはまた文化財保護の一助として広く活用されることを願ってやみません。

最後に、千葉県教育庁文化課・市原市街路課・市原市教育委員会をはじめ関係諸機関の御助言、御協力に深く感謝いたします。

昭和62年 3 月25日

財団法人 市原市文化財センター
理 事 長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市五井字蔭目3,888番地に所在する御蔭目浅間神社古墳の調査報告書である。

2. 調査は、市原市都市部街路課による五井駅東口線建設に伴い実施したものである。

3. 発掘調査・整理作業は以下の通り行った。

発掘調査 昭和60年5月1日～昭和60年7月31日

担当 浅利幸一

整理作業 昭和62年2月1日～昭和62年3月31日

担当 浅利幸一・大村 直

4. 本書の原稿執筆は、Ⅲ－3－(1)埴輪を大村が、他は浅利幸一が行った。

5. 調査および本書の作成に際し、次の諸機関に御指導と御協力を賜った。

千葉県教育庁文化課・市原市都市部街路課・市原市教育委員会教育指導部文化課

6. 本書に使用した方位は、座標北である。

7. 本書に使用した地形図(第1図)は、国土地理院発行の1:25,000「姉崎・五井」である。

市原市文化財センター組織表

発掘（昭和60年度）

役員

理事長	星野一郎(教育委員会教育長)	理事	松崎良一(市企画部長)
副理事長	横濱辰夫(教育委員会教育指導部長)	理事	斎藤栄亮(市総務部長)
常務理事	内藤隆(専任)	理事	中島英夫(市都市部長)
理事	滝口宏(早稲田大学名誉教授)	理事	松下隆(市総務部財政課長)
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)	監事	白鳥一夫(市会計課長)
理事	海上信久(姉崎神社宮司)	監事	松本辰之助(教育委員会総務課長)

職員

庶務課		調査研究員	田中清美
課長	田丸萬富	調査研究員	近藤敏
主事	補大鐘光江	調査研究員	高橋康男
事務員(嘱託)	秋田晴美	調査研究員	田所真一
事務員(嘱託)	藤沢ひとみ	調査研究員	浅利幸一
事務員(嘱託)	石渡あゆみ	調査研究員	大村直紀
調査課		調査研究員	木對和
課長	清藤一順	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
主幹	石田広美	調査研究員(嘱託)	半田堅三
主幹	山口直樹	調査研究員(嘱託)	田中新史
主任調査研究員	宮本敬一	事務員(嘱託)	高浦貞子
調査研究員	米田耕之助		

整理（昭和61年度）

役員

理事長	星野一郎(教育委員会教育長)	理事	松崎良一(市企画部長)
副理事長	横濱辰夫(教育委員会教育指導部長)	理事	斎藤栄亮(市総務部長)
常務理事	岩見一民(専任)	理事	地引希彦(市都市部長)
理事	滝口宏(早稲田大学名誉教授)	理事	松下隆(市財政部長)
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)	監事	白鳥一夫(市会計課長)
理事	海上信久(姉崎神社宮司)	監事	斎藤崇雄(教育委員会総務課長)

職員

庶務課		調査研究員	浅利幸一
課長	田丸萬富	調査研究員	大村直紀
主事	補大鐘光江	調査研究員	近藤敏
事務員(嘱託)	秋田晴美	調査研究員	高橋康男
事務員(嘱託)	石渡あゆみ	調査研究員	田所真一
調査課		調査研究員	木對和
課長	清藤一順	調査研究員(嘱託)	田中新史
主幹	石田広美	調査研究員(嘱託)	半田堅三
主幹	山口直樹	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
主任調査研究員	宮本敬一	事務員(嘱託)	高浦貞子
主任調査研究員	米田耕之助	事務員(嘱託)	長谷川いづみ
調査研究員	田中清美		

本文目次

序 文

理事長 星 野 一 郎

例 言

(財)市原市文化財センター組織表

I	調査に至る経緯と経過	(1)
II	遺跡の立地と環境	(1)
III	古墳と出土遺物	(5)
1	古墳	(5)
2	その他の遺構	(11)
3	出土遺物	(11)
(1)	埴輪	(12)
(2)	土器	(34)
IV	まとめ	(40)

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡の位置および周辺の遺跡分布図
- 第2図 遺跡周辺の地形図
- 第3図 古墳現況地形測量図
- 第4図 遺跡全体図
- 第5図 古墳地形測量図
- 第6図 古墳土層断面図
- 第7図 埴輪出土状況
- 第8図 円筒埴輪(1)
- 第9図 円筒埴輪(2)
- 第10図 円筒埴輪(3)
- 第11図 円筒埴輪(4)
- 第12図 円筒埴輪(5)
- 第13図 円筒埴輪(6)
- 第14図 円筒埴輪(7)
- 第15図 円筒埴輪(8)
- 第16図 円筒埴輪(9)
- 第17図 円筒埴輪(10)
- 第18図 形象埴輪(1)
- 第19図 形象埴輪(2)
- 第20図 形象埴輪(3)
- 第21図 形象埴輪(4)
- 第22図 形象埴輪(5)
- 第23図 土器(1)
- 第24図 土器(2)
- 第25図 土器(3)
- 第26図 土器(4)

図 版 目 次

- 図版1 御蔭目浅間神社古墳周辺の航空写真
- 図版2 上:御蔭目浅間神社古墳遠景
下:調査前の遺跡近景
- 図版3 上:調査前の御蔭目浅間神社古墳
下:周構調査後の御蔭目浅間神社古墳
- 図版4 上:古墳盛り土状況
下:古墳盛り土状況
- 図版5 上:古墳と埴輪出土状況
下:西側調査区
- 図版6 上:土層と埴輪出土状況
下:前方部埴輪出土状況
- 図版7 埴輪(1) 1～4・7
- 図版8 埴輪(2) 6・9～10・12
- 図版9 埴輪(3)
- 図版10 埴輪(4)
- 図版11 埴輪(5)
- 図版12 埴輪(6)
- 図版13 土器(1～14)
- 図版14 土器(15～24)
- 図版15 土器(25・26・30・34～37・43)

I 調査に至る経緯と経過

東京湾東岸の北に位置する市原市は、1960年代後半から京葉工業地帯の一躍を荷ない、また70年代には首都圏のベッドタウンとして、大規模な区画整理が行われ急速な開発とともに発展をとげてまいりました。特に、北端の千葉市域と境を接する千原台地区および市役所周辺の国分寺台地区では、大規模な区画整理とともにそれに伴う埋蔵文化財の緊急調査が行われ、多くの成果とともに多量の遺物を出土しています。以後、先人達の足跡としての「郷土の歴史」に対する、市民の関心も深まりつつあります。まさに開発と埋蔵文化財保護は、背中合せに存在すると言えます。

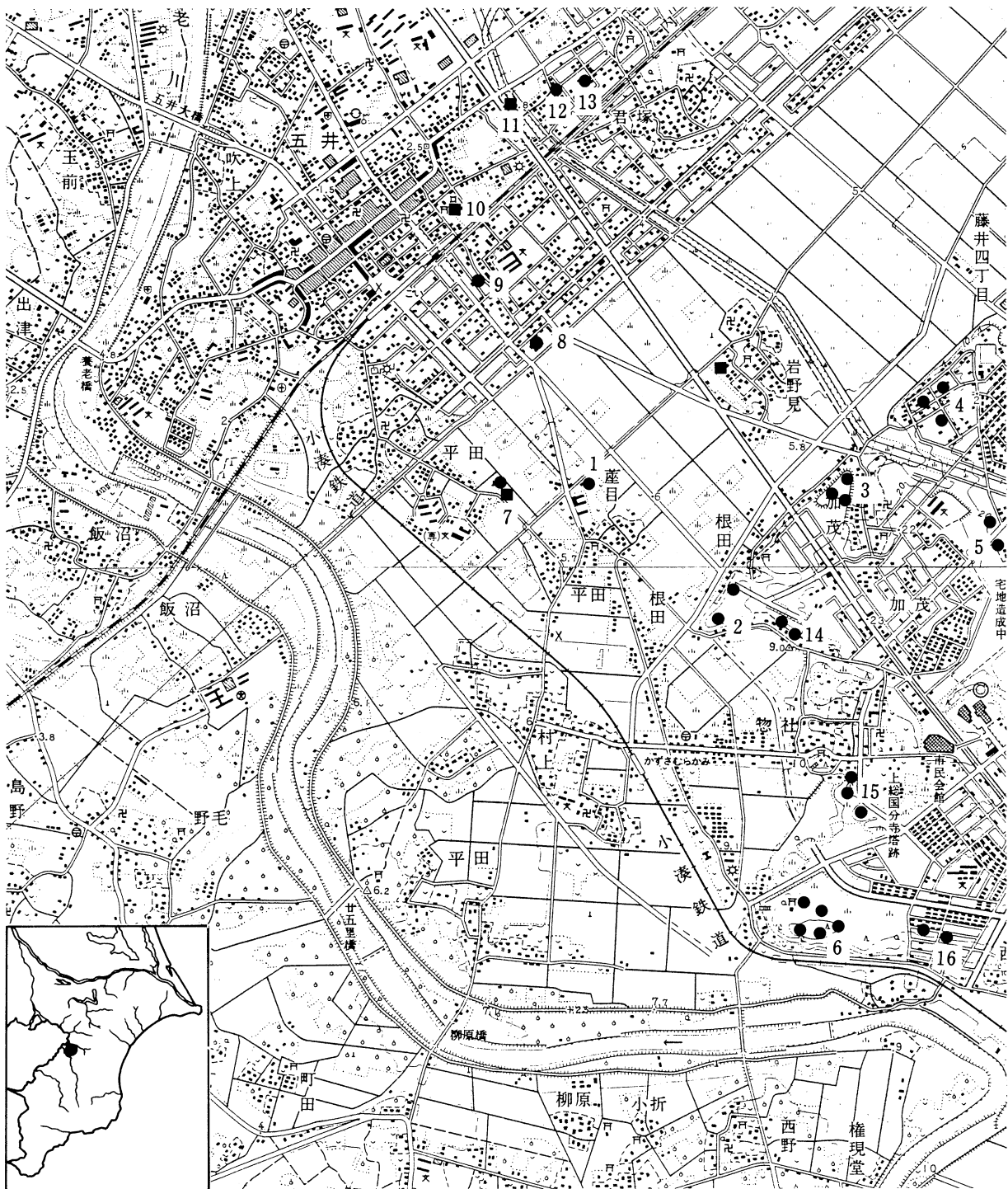
市原市では、住み良い町づくりを旨とし居住区の区画整理事業とともに、交通網の一層の充実を図るべく都市計画道路整備を実施しております。本報告書の御蔭目浅間神社古墳もこうした道路建設に伴う埋蔵文化財調査として、内房線五井駅東口と市役所などの所在する国分寺台地区を結ぶ都市計画道路の五井駅東口線着工に際して行ったものであります。以下調査に至る経過を付記する。

昭和58年3月31日付けで、市原市長井原恒治より、事業地域内の埋蔵文化財所在の有無およびその取扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。それを受けて、千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会の現地路査により、昭和58年7月15日付けで、「古墳1基」の回答がなされた。この回答により、千葉県教育庁文化課・市原市都市部街路課・市原市教育委員会の三者の協議の結果、記録保存とする方針が決まった。記録保存に伴う発掘調査は財団法人市原市文化財センターへの委託事業として、昭和60年5月1日より実施するに至った。

II 遺跡の立地と周辺環境

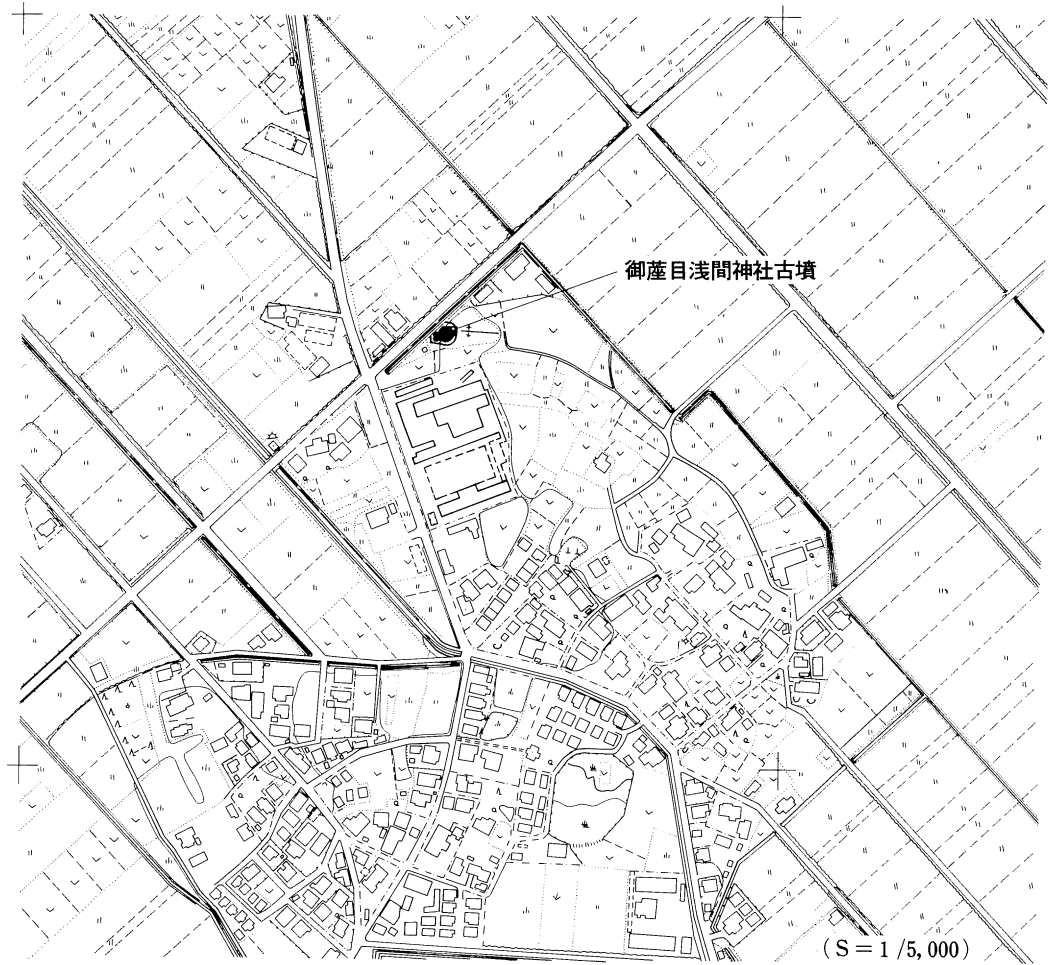
市原市は、千葉県房総半島に市北西域を東京湾東岸に面し、南は房総半島中央部に至る、南北35km・東西21km・総面積約366.63K㎡を有して位置している。市原市の中央部を、蛇行しながら南北に貫いて北流し東京湾に注ぐ養老川は、かつてはその河筋を幾度となく変え流域には広大な河岸平野を、また河口域では上流から流入した堆積土により三角州を形成し、肥沃な海岸平野をもたらしている。市原市の歴史は、まさに養老川の歴史と言っても過言ではあるまい。

御蔭目浅間神社古墳は、この海岸平野の標高約6mの自然堤防の上に位置する。現在では、東京湾埋立・市街化・圃場整理等により、古墳築造時の周辺環境を復元することは困難ではあるが、当時は幾つもの自然堤防の上に古墳や集落を形成していたことが推測できよう。



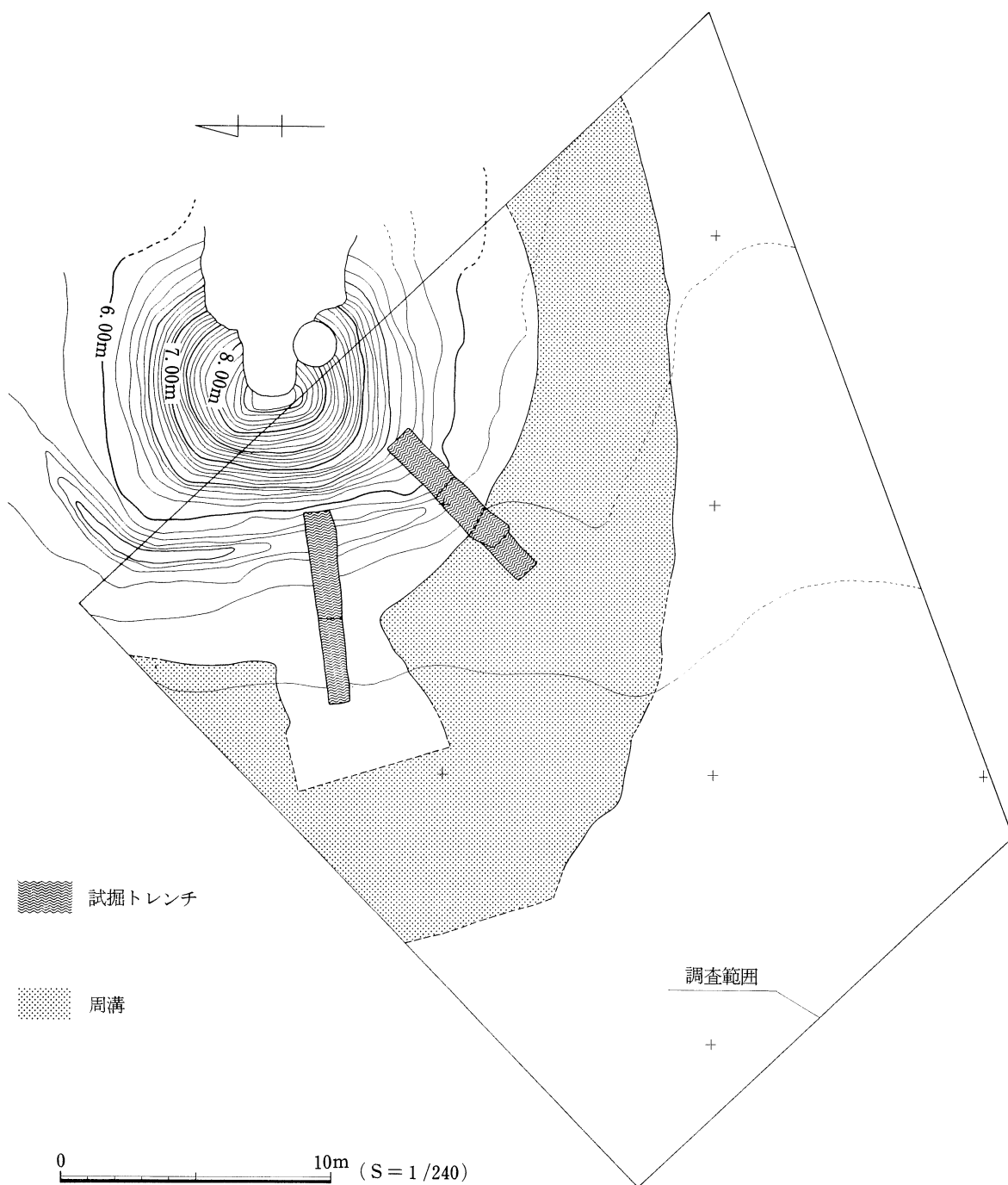
- | | | |
|--------------|---------------|-------------------|
| 1. 御簾目浅間神社古墳 | 7. 平田古墳・平田供養塚 | 13. 君塚クワノ木古墳(供養塚) |
| 2. 根田(代)古墳群 | 8. 忠臣台古墳 | 14. 根田(辺田)古墳群 |
| 3. 西谷古墳群 | 9. 大六天古墳 | 15. 神門古墳群 |
| 4. 向原台古墳群 | 10. 若宮八幡神社供養塚 | 16. 東門部多古墳群 |
| 5. 南向原古墳群 | 11. 波瀾行人塚 | |
| 6. 諏訪台古墳群 | 12. 君塚天神山古墳 | |

第1図 遺跡の位置および周辺の遺跡分布図(1/25,000)



第2図 遺跡周辺の地形図

現在周知される周辺の古墳・塚には、海岸平野に所在するものとして平田古墳・平田行人塚・中臣台古墳・大六天古墳⁽¹⁾・若宮八幡神社供養塚・波瀲行人塚・君塚天神山古墳・君塚クワノ木古墳・岩野見供養塚、また東方0.7kmの洪積台地上の国分寺台遺跡群に所属する、根田代・西谷・向原・諏訪台等の古墳群の存在が知られている。また土器散布地から遺跡として認められるものに、君塚西・岩野見・村上遺跡群や市原市字一ノ坪に所在する条里遺跡等の他、国分寺台遺跡群が存在する。このうち調査が実施された遺跡は、国分寺台遺跡群・君塚クワノ木古墳⁽²⁾・村上遺跡群⁽³⁾の一部がある。また、波瀲行人塚は古墳を改変した塚と考えられる。このような行為は、君塚クワノ木古墳や今回調査を実施した御蔭目浅間神社古墳からも明らかになり、岩野見・平田・若宮八幡神社等の供養塚もまたその可能性が指摘できよう。これ等の海岸平野に所在する遺跡は、その多くがかつて自然堤防と考えられるやや高い位置に所在していることも共通点として上げられる。



第3図 古墳現況地形測量図

御蔭目浅間神社古墳東方の国分寺台遺跡群には、多くの古墳群が所在し調査が行われているが、御蔭目浅間神社古墳の所属時期の後期古墳では稲荷台・山倉・南向原・諏訪台・根田代・西谷

・向原台古墳群中に所在する。その内埴輪を所有する古墳は、国分寺台山王街道に所在する350号墳⁽⁴⁾・持塚一(194)号墳⁽⁵⁾・南向原四(121)号墳⁽⁶⁾・西谷十(128)号墳⁽⁷⁾・根田一(130)号墳⁽⁸⁾・山倉一(203)号墳⁽⁹⁾の6基が存在するのみである。

註

- (1) 中臣台・大六天の両古墳は市原市遺跡台帳に記載されるだけですでに消滅している。
- (2) 田中清美・君塚発掘調査団「君塚クワノ木古墳」1980年
- (3) 市原市文化財センター「昭和57・58年度年報」『上総国府跡推定地』
市原市文化財センター「昭和59年度年報」『村上城跡(上総国府推定地)』
- (4) 早稲田大学考古学研究室で一部調査、田中新史「上総国分寺台発掘調査概報」1982年
- (5) 上総国分寺台遺跡調査団「上総国分寺台調査概報」1977年
- (6) 上総国分寺台遺跡調査団「南向原」早稲田大学出版部1976年
- (7) 田中新史『古代探叢Ⅱ』早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集1985年
- (8) 上総国分寺台遺跡調査団「上総国分寺台調査概報」1981年
- (9) 註(6)に同じ。

Ⅲ 古墳と出土遺物

1. 古墳

古墳の現況

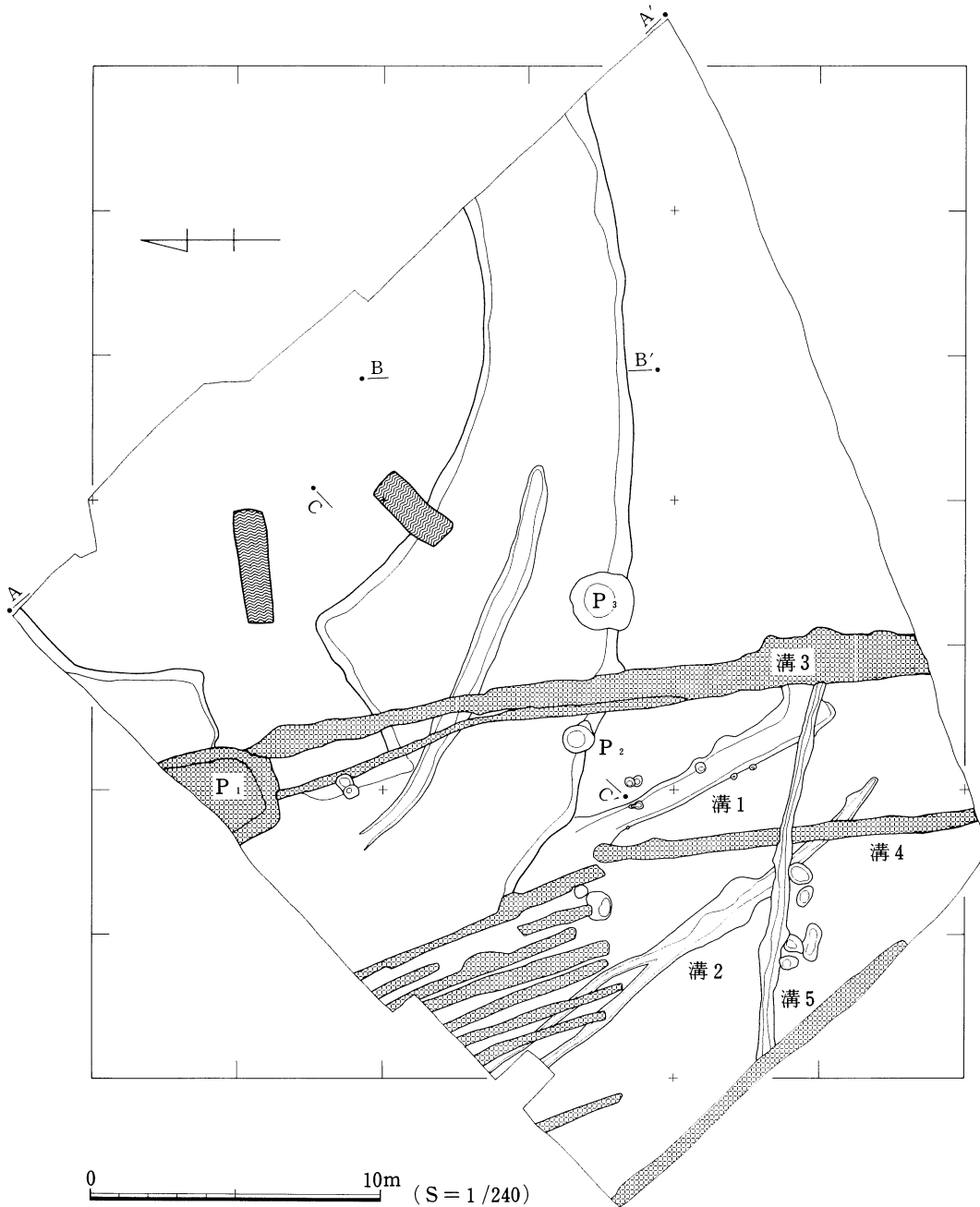
古墳には、墳頂に富士浅間神社を祭った石碑が置かれ、東側半分は墳頂に通じる石段の他・墳丘を飾るように大小の石が葺かれ、信仰対象としての塚に改変し利用されている。塚の北西には幅5mほどの舗装された農道が通り、その間に道に沿って素掘りの幅2mほどの排水溝が施設され、また東側には安波須神社本殿が建てられ、周辺には圃場整備の行われた水田が広がっている。本墳は養老川の開積した自然堤防の微高地に占地すると考えられるが、圃場整備や市街化の進んだ現状からは、古墳築造時の地形を復元することは困難であり、明治時代の古図や旧家の範置状況から推測するにとどまる。墳形は現況では、南北約16m・東西約12m・高さ約3.1mを測り、方形を程する塚である。調査区域は、塚の南西側の1/2とその南西域800㎡が対象地である。

調査の結果

表土は、現表面から0.3～0.8mを測り、遺構検出面はやや粘質を帯びた白黄色の土層を掘り込んで検出した。検出面は、周辺の水田面よりやや低い位置にある。堆積土中には遺物の出土もほとんどなく、人工・自然環境に作用された二次的な堆積によるものと考えられる。

古墳

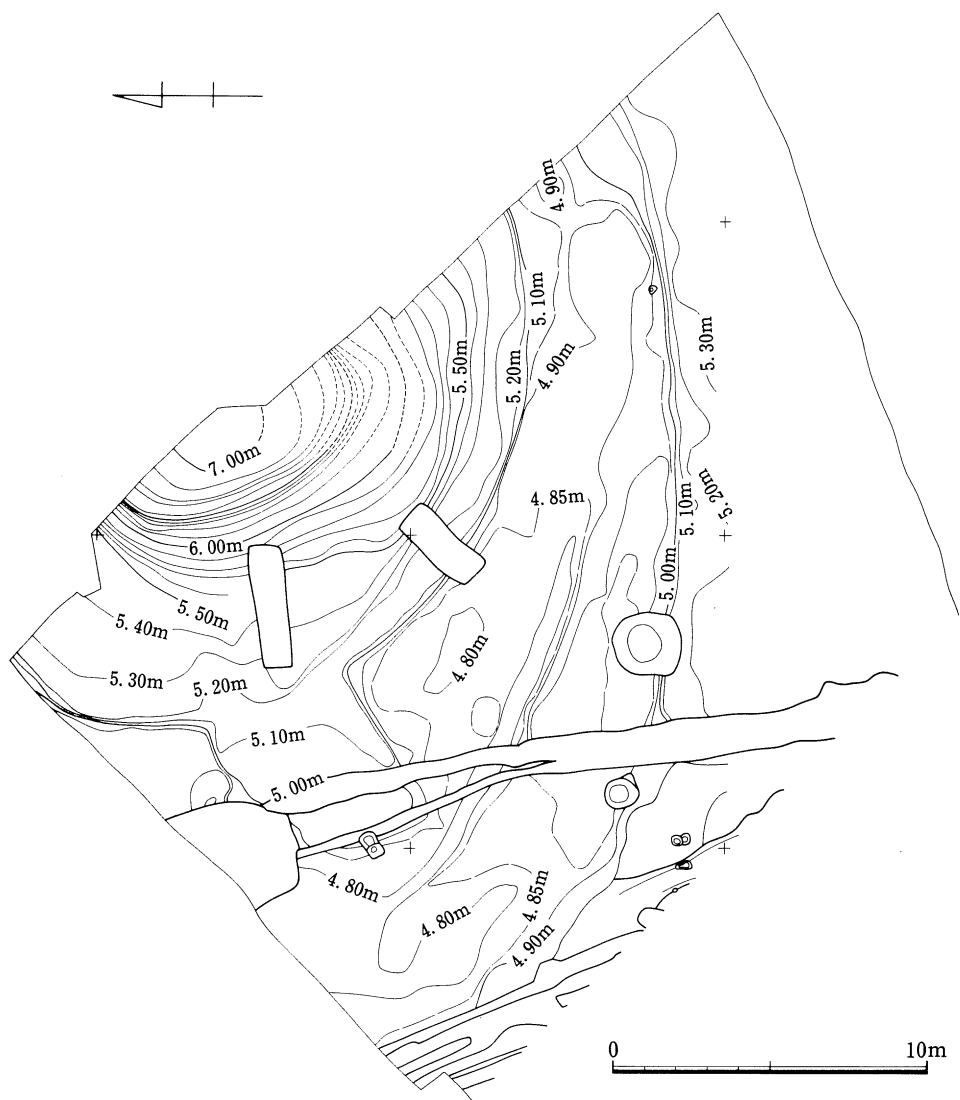
墳形は、全体の1/3ほどの調査ではあるが、主軸方向をほぼ東西方位に置き、西側に前方



第4図 遺跡全体図

部状の突出部を有する帆立貝形の平面形に復形できる。円丘部径約24.5m・前方部くびれ部幅5.0m・前方部幅6.3m・前方部長6.0mを測り、全長約30.5mと推定できる。

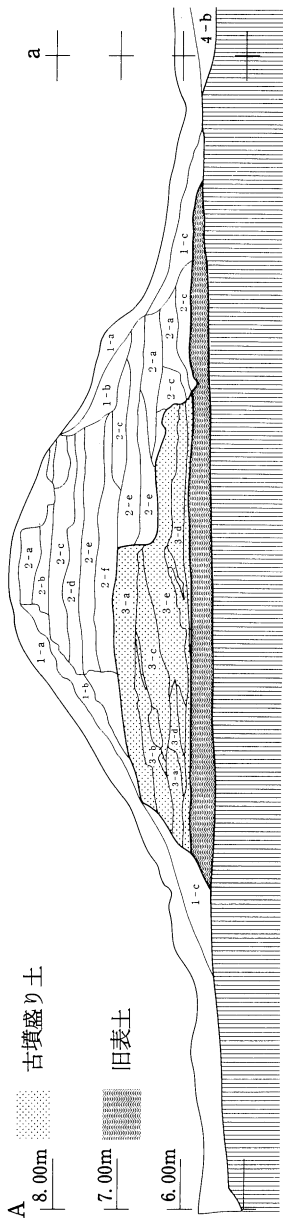
周溝は、南側半分と前方部全面を調査し、南側は幅4.5～6mで前方部に向って漸次的に幅



第5図 古墳地形測量図

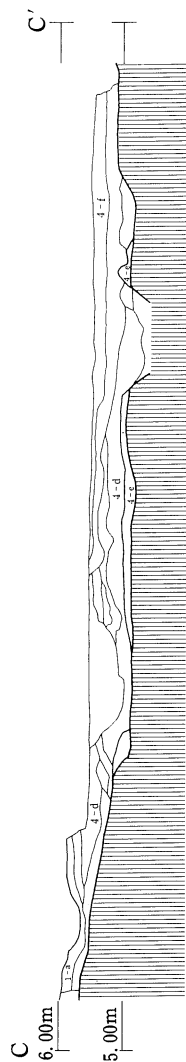
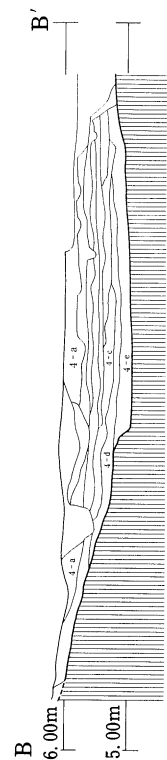
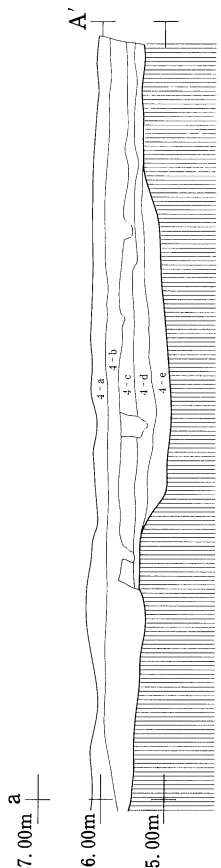
が広がる。前方部前面の溝は、幅約6mを測る。また前方部前面の周溝外辺は数条の溝によって攪乱され不明であるが、前方部前辺と平行する直線的な状況を推測できる。したがって周溝平面形は、縦長の安定感の良い倒卵形に復元できよう。周溝の深さは、円丘裾および周溝外側が大きく削平され当時の深さは不明で、現況で0.2～0.4mを測る。墳丘下旧表上面との比高差は約1mを測り、築造時の溝の深さを推定できようか。

周溝底面は、緩やかな凹凸面はあるものの比較的平坦である。周溝の施設として、南周溝底面中央のくびれ部寄りから前方部前面に至る幅0.7～0.9m・深さ0.05～0.1m・長さ14.5mを測



土層説明

- 1-a 暗褐色土 表土
- 1-b 暗褐色土 ブロック状の黒褐色土
- 1-c 淡黒褐色土 白色粘土ブロック含む。
- 2-a 白色粘土ブロックに多量の黒褐色土
- 2-b 黒色土ブロックに白色粘土ブロック
- 2-c 黒色土ブロック若干の白色粘土
- 2-d 褐色砂粒土に黒色土ブロック
- 2-e 黒褐色土ブロック
- 3-a 黒褐色土に白色粘土ブロック混り。
- 3-b 黒褐色土に多量の白色粘土混り
- 3-c 白色粘土ブロックに暗茶褐色土混り。
- 3-d 白色土ブロック
- 3-e 白色粘土ブロックに黒褐色土混り。
- 4-a 暗褐色土 二次堆積表土
- 4-b 暗黒褐色土ブロック
- 4-c 暗黒褐色土に黒色土ブロック混り
- 4-d 暗黒褐色土に黒色土ブロックと白色粘土粒混り
- 4-e 黒色土粘質有り。



第 6 図 古墳土層断面図



第7図 埴輪出土状況

る溝を検出した。この溝は、周溝外辺と同様な弧を描き設けられ、また封土の状況からも周溝に付属する施設として考えてよい。

墳丘は、古墳本来の盛土と富士浅間神社を祭る為の2度の盛り土に大別され、後者は二度行われたようである。古墳の盛土は、旧表面上に1.25mが存在し、土層断面は円丘部中央が高く外側に向って漸次的に低くなる傾向が見られる。土質は、旧表下の白黄色を程するやや粘質を帯びる褐色土を基本とする。構築は比較的雑な感がある。本来の盛土は、円丘部中央にわずかに残すだけで、塚構築以前にすでに大部分を削平され、径7mほどのをのこすだけであった。

埋葬施設は検出されず、墳丘残存状況から見てもすでに削平され失われていよう。

塚の盛土は、古墳盛土上に1.65m存在し、土層から土を水平に規則的に盛った傾向がある。土質は、ややよごれた暗褐色土を基本とするが、古墳盛土と同様な土質も見られる。

旧表土は、墳丘下に0.35～0.4mの堆積があり、やや粘質の暗黒色土である。旧表上面は平坦で、盛土以前に整地が行われたとも感じられる。

2. その他の遺構

溝1は、長さ約12m・深さ0.05～0.1m。溝2は、長さ約16.5m・深さ0.05～0.1mを測る。溝1・2とも覆土からは、やや古い時期の感があるものの出土遺物もなく時期不明である。溝3は、前方部および周溝を掘り込み調査区域を南北に貫く溝で、北側は2条に分かれる。溝内には、径10cm前後の竹管が埋納されており、近年の水田に伴う灌漑用の配水管として考えられる。また、溝3の北端に掘り込まれるP₁は、溝3を掘り込んでいる。他のスクリートンで指した溝も覆土や掘り方の状況から、近年の遺構と考えてよからう。P₃は、径約2m・深さ約0.3mを測る土壇状の落ちこみで、出土遺物も無く時期・性格の不明な遺構である。P₂は、径1.1m・深さ0.8mを測り、覆土は周溝内埴輪包含層と同様な土質である。

調査区域内では、溝・ピット等を検出するものの古墳以外には、調査対象として積極的な遺構は検出されない。

3. 出土遺物

遺物は、周溝覆土内と墳丘下旧表中から出土し、周溝からは形象を含む多量の埴輪と奈良～平安期の土器、旧表中からは古墳時代前期と縄文時代の土器片を検出した。

古墳に伴う遺物は埴輪だけで、その他は無い。埴輪は周溝内出土がほとんどで前方部周辺からの検出が多く、形象埴輪は前方部状の突出部周辺に集中している。しかしながらその多くが細片で広く散在し、原位置を保つものはない。

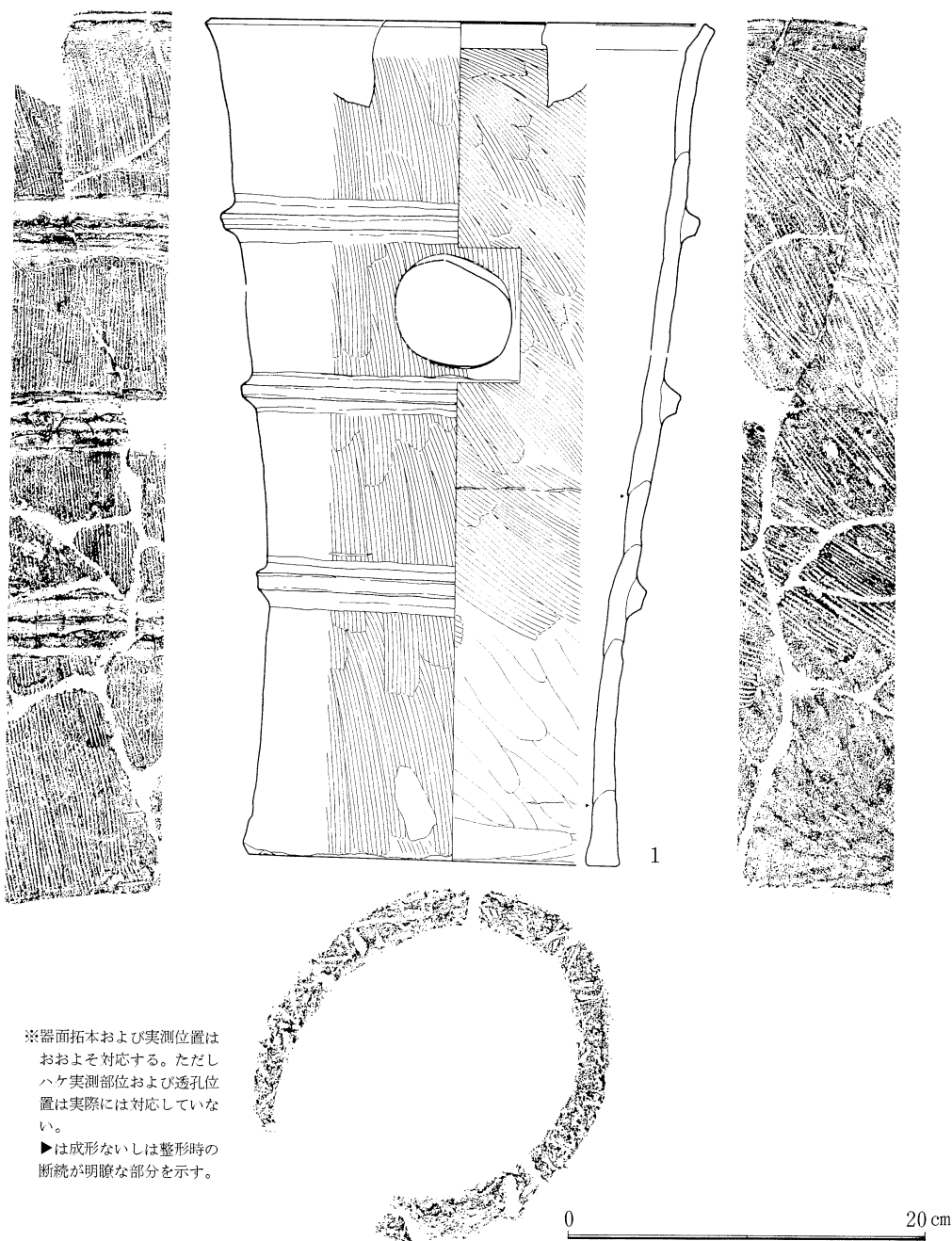
(1) 埴輪

今回の調査では、本古墳に伴うと考えられる遺物は、埴輪のみである。出土した埴輪は、量的には比較的まとまったものとなっているが、原位置での出土はなく、また小破片の比重が高い。しかし、接合、復原により、全体の形状をうかがうことのできる個体もある。

以下、円筒埴輪、形象埴輪にわけ、各個体ごとの観察結果、および、各部位の特徴、製作技法等を記述する。

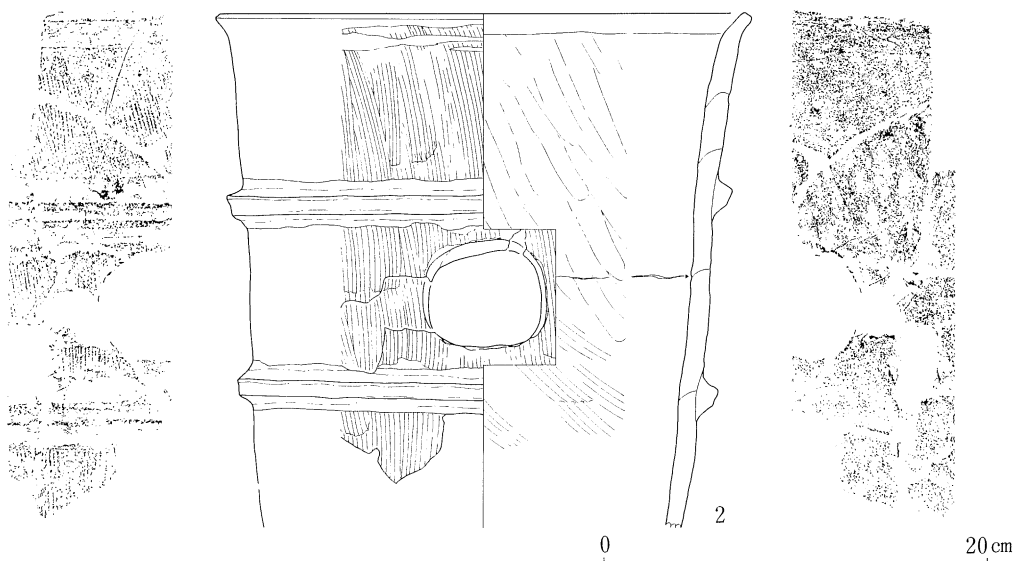
a. 円筒埴輪(第8～17図 図版7～9)

1は、口縁部から底部まで唯一復原できたものである。口縁部2/3を欠損する。普通円筒埴輪であり、口径28.3cm、高さ47.3cmを測る。また基部径20.3cm、口縁高11.4cm、突帯間上段高9.6cm、下段10.7cm、基部高15.6cmである。全体の形状は3突帯4段であり、中間段上段に対向する2孔の円形の透孔をもつ。口唇部は内面に稜をもち外方へやや屈曲する。端部は面をもち、ヨコナデにより中央が凹む。突帯はやや上端が突出する台形を呈し、突帯高は1.1～0.9cmを測る。基部成形は、幅4～4.8cmの粘土帯1枚による。外面整形は下から上への縦方向のハケであり、口唇部、突帯はヨコナデを加える。内面は基部が左上りの指ナデ、これより上は同方向のハケによる。ハケ施工具は内外面異なり、ハケ条線は外10本/2cm、内9本/2cmである。器面色調は褐色であり、焼成は不良。胎土は長石等白色細粒を多量に含む。2は、普通円筒埴輪である。上半部はほぼ復原できた。各部位の計測値は、口径28.2cm、現存高27.3cm、口縁高10.4cm、突帯間上段高9.6cmである。中間段上段に対向する2孔の円形の透孔をもつ。孔径は左右約6.5cmを測る。下段に透孔をもつかどうかは不明である。突帯高は1.1～0.9cmを測る。外面整形は縦方向のハケであり、口唇部、突帯はヨコナデを加える。内面は指ナデを基調とし、局部的にハケが観察できる。ハケ条線は内外面異なり、外11本/2cm、内9本/2cmである。器面色調は褐色を呈し、焼成不良。胎土は白色細粒を多量に混合する。3は、普通円筒埴輪である。上半部1/6周接合した。各部位の計測値は、口径が28.8cm、現存高33.3cm、口縁高12.8cm、突帯間上段高13.5cmである。透孔については、現存部では確認できない。突帯高は1.0～0.7cmを測る。外面整形は縦方向のハケであり、突帯には付設時にヨコナデを加える。ただし内外面とも口唇部ヨコナデは認められない。内面は外面と同工具のハケを施したのち、別工具のハケを局部的に加える。ハケ条線は11本/2cmと7本/2cmである。器面色調は暗灰褐色、断面は褐色を呈す。焼成は良好であり、胎土は白色細粒を多量に混合する。4は、普通円筒埴輪である。口縁部1/4遺存する。口径30.6cm、現存高22.2cm、口縁高18.6cmを測る。中間段上段に透孔端部が確認できる。突帯高は0.9cmを測る。器面調整は内外面とも下方からのハケであり、突帯、口唇部にヨコナデを加える。ハケ条線は10本/2cmであるが、外面に対



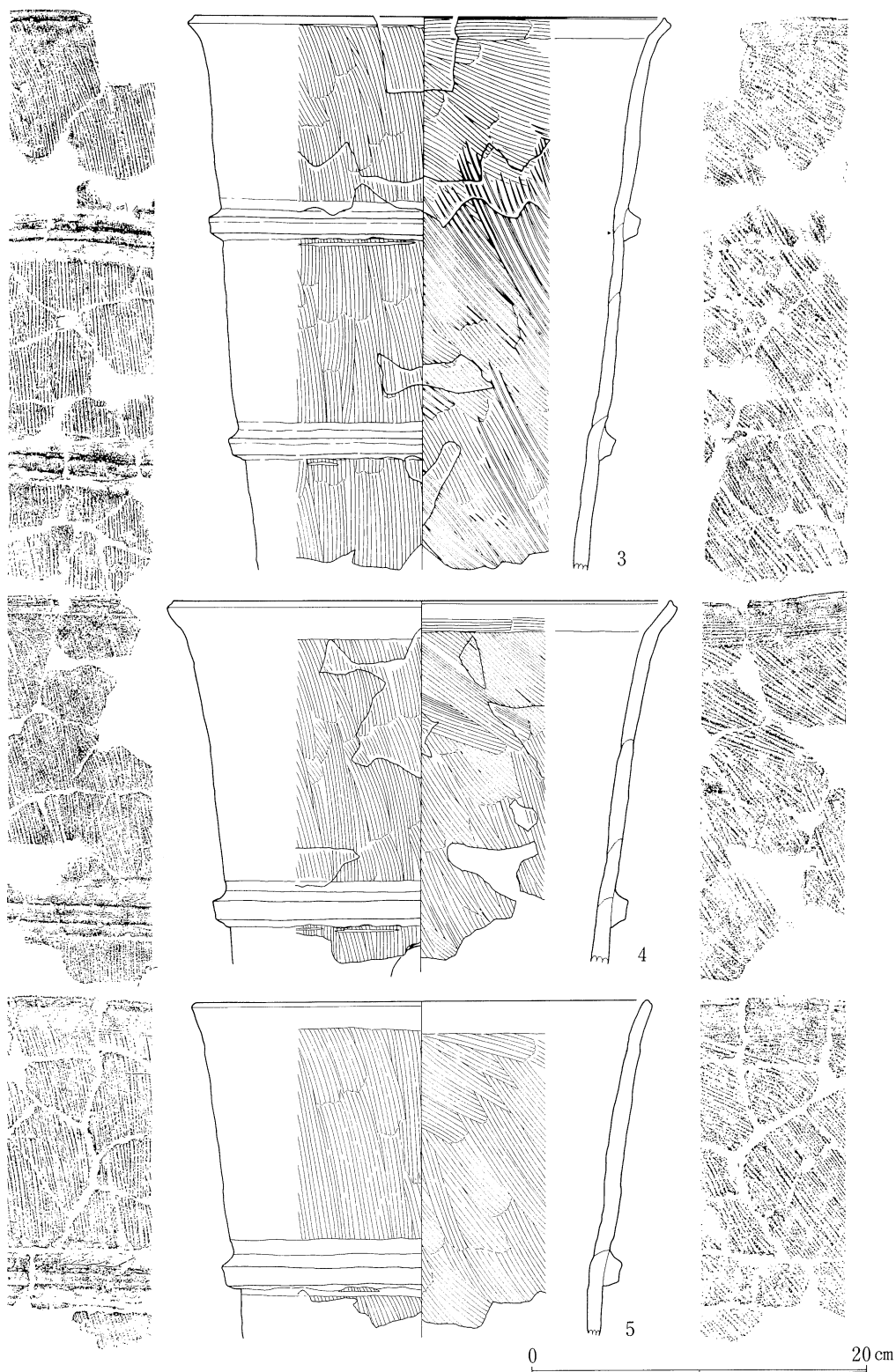
第8図 円筒埴輪(1)

して内面のハケは深く、原体が異なる。器面色調は暗灰褐色を呈し、焼成は良好、胎土は白色細粒を多量に含む。5は、普通円筒埴輪である。口縁部約1/2を遺存する。口径27.7cm、現存高20.0cm、口縁高16.4cmを測る。透孔は確認できない。突帯高は0.8cmである。器面調整は内外面とも下方からのハケであり、突帯、口唇部にヨコナデを加える。口唇部は他と異なり丸



第9図 円筒埴輪(2)

くなる。ハケ条線は10本/2cmである。器面色調は褐色を呈し、焼成不良。胎土は白色細粒の他赤色酸化粒が目立つ。6は、朝顔形円筒埴輪である。口縁部約1/4周遺存する。口径39.8cm、現存高23.5cmを測る。突帯高は0.9~0.5cmである。外面整形は、下方からの縦方向のハケであり、内面は右下からの斜・横方向のハケである。口唇部と突帯はヨコナデを加える。ハケ条線は10本/2cmである。器面色調は淡茶褐色、断面は暗灰褐色を呈す。焼成は良好、胎土は白色細粒を多量に含む。7は、基部である。基部1/2周遺存する。現存高21.7cm、基部径17.6cm、基部高18.8cmを測る。透孔は確認できない。突帯高は0.6cmである。外面整形は、下方からの縦方向のハケであり、内面は指ナデののち、ハケを加える。ハケ条線は10本/2cmである。基部成形は、幅約5cmの粘土帯をまいたものであり、確認できる範囲では1枚である。器面色調は褐色を呈し、焼成不良。胎土は白色細粒を多量に含む。8は、普通円筒埴輪である。現存高18.9cm、口縁部高15.7cmを測る。中間段上段で円形の透孔が確認できる。突帯高は0.8cmである。外面整形はハケであり、突帯部、口唇部にヨコナデを加える。内面は斜方向のハケののち、口唇部に右からの横ハケ、ヨコナデを加える。ハケ原体は内外面異なり、条線は外11本/2cm、内9本/2cmである。器面色調は暗灰褐色を呈す。9は、普通円筒埴輪である。現存高20.3cm、口縁高15.3cmを測る。円形の透孔が確認できる。突帯高は約0.8cmである。外面は縦方向のハケののち、突帯部、口縁部にヨコナデを加える。内面は、ハケ原体が異なり、斜方向から横方向に施す。さらにハケ断続部に指ナデを加える。指ナデは突帯付設に伴うものとも考えられる。ハケ条線は、外が10本/2cm、内面が8本/2cmである。器面色調は暗灰褐色である。10は、普通円筒埴輪である。現存高18.5cm、口縁高16.2cmを測る。突帯高は0.8cmで

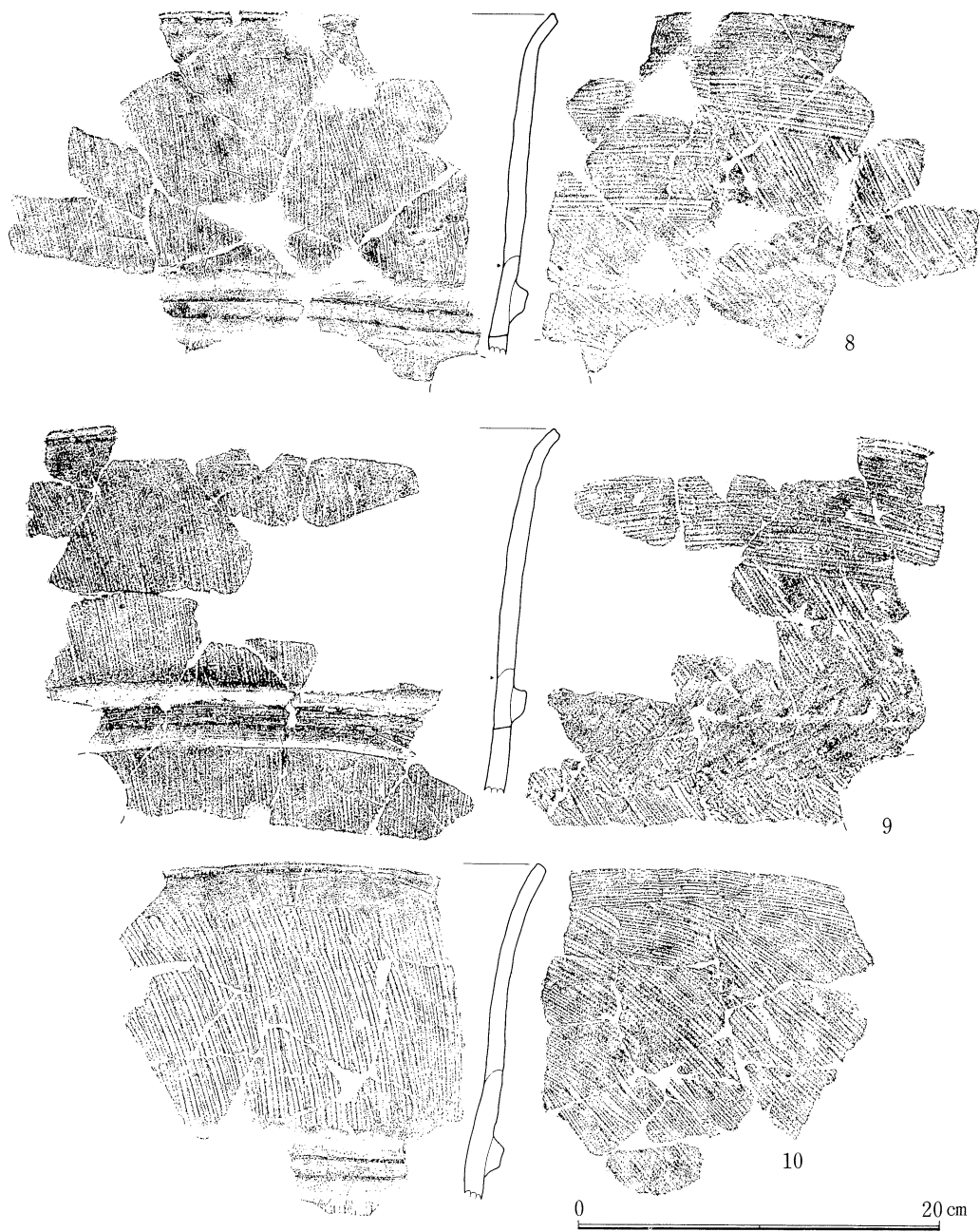


第10図 円筒埴輪(3)



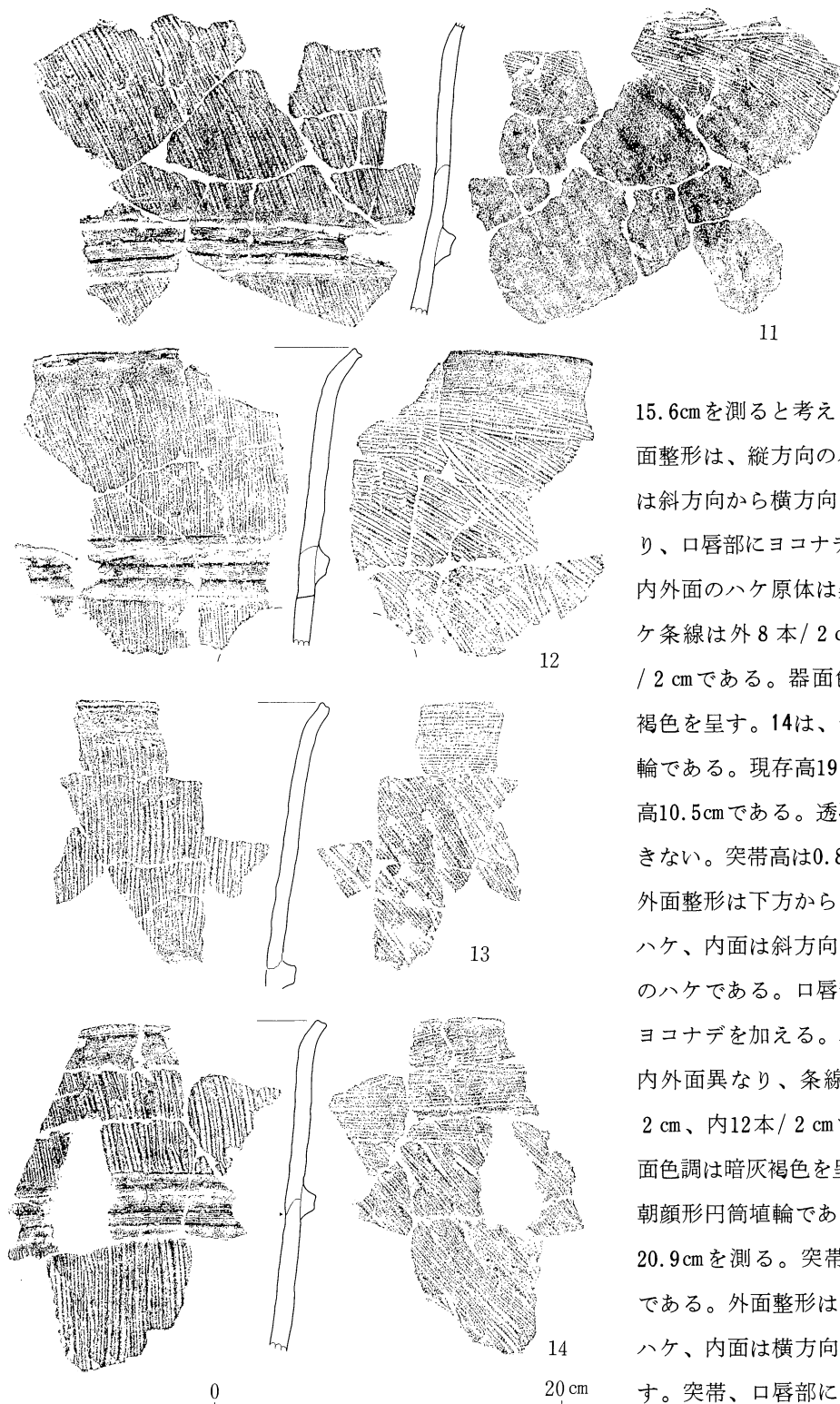
第11図 円筒埴輪(4)

ある。外面整形は、下から上への縦方向のハケであり、突帯、口唇部にヨコナデを加える。ヨコナデは内面におよばない。内面は、原体の異なる斜方向のハケののち、口唇部に横方向のハケを施す。ハケ条線は7～8本/2cmと11本/2cmである。器面色調は淡茶褐色を呈す。11は、普通円筒埴輪である。現存高11.8cmを測る。円形の透孔が確認できる。突帯高は1.0～0.9cmである。外面整形は縦方向のハケであり、内面は指ナデののち、口唇部に横方向のハケを施す。内外面のハケ原体は異なると思われる、ハケ条線は外9本/2cm、内11本/2cmである。器面色調は、淡茶褐色を呈す。12は、普通円筒埴輪である。現存高17.2cm、口縁高12.6cmを測る。円



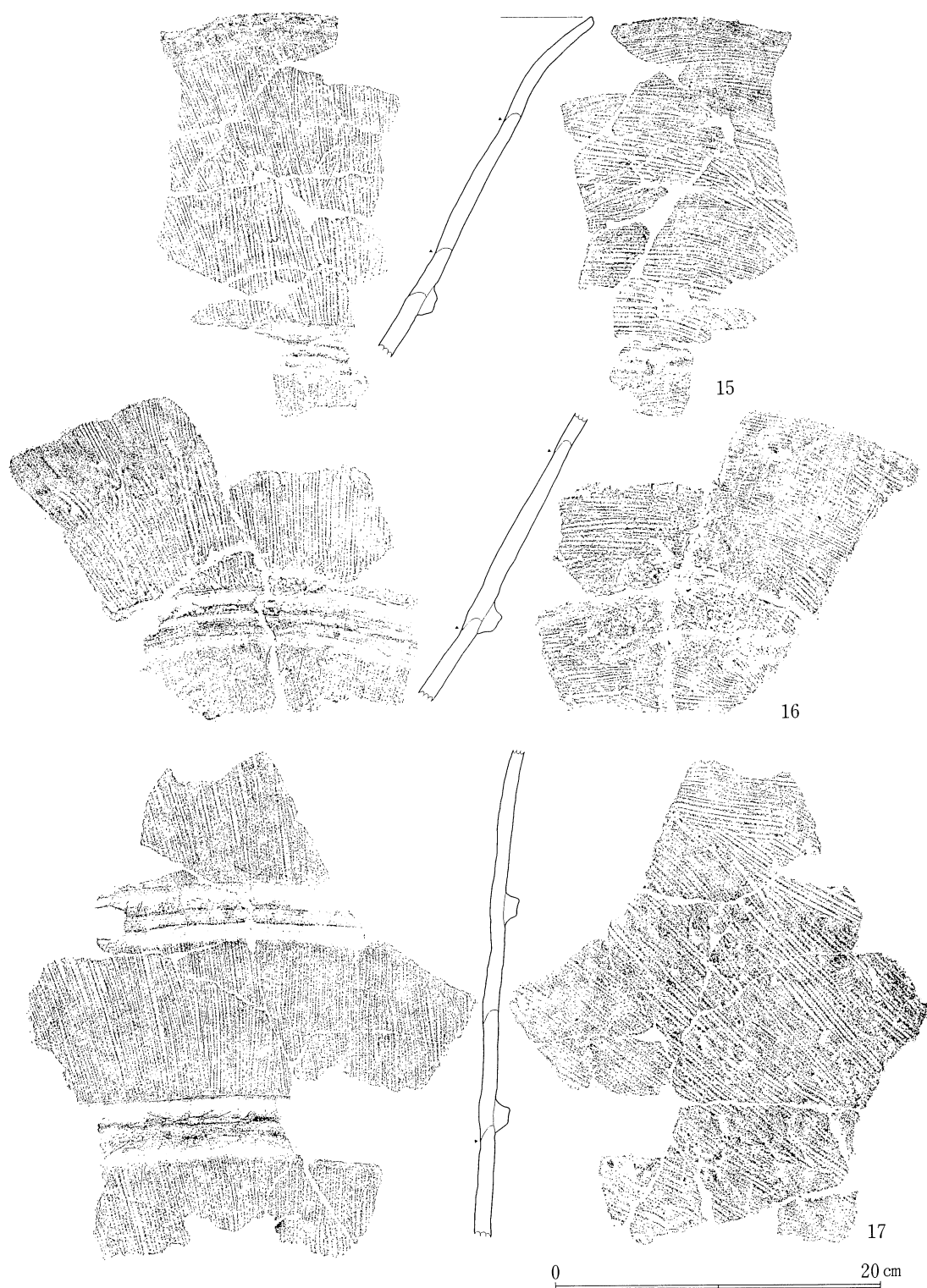
第12図 円筒埴輪(5)

形の透孔が確認できる。突帯高は0.8cmである。外面整形は、下方からのやや斜方向のハケであり、突帯部、口唇部にヨコナデを加える。内面は、体部が斜方向、口唇部は横方向のハケのちヨコナデ。内外面のハケ原体は異なり、ハケ条線は外11本/2cm、内9本/2cmである。色調は淡茶褐色～暗灰褐色を呈す。13は、普通円筒埴輪である。現存高15.3cm、口縁部高は約



第13図 円筒埴輪(6)

15.6cmを測ると考えられる。外面整形は、縦方向のハケ、内面は斜方向から横方向のハケであり、口唇部にヨコナデを加える。内外面のハケ原体は異なり、ハケ条線は外8本/2cm、内14本/2cmである。器面色調は暗灰褐色を呈す。14は、普通円筒埴輪である。現存高19.1cm、口縁高10.5cmである。透孔は確認できない。突帯高は0.8cmである。外面整形は下方からの縦方向のハケ、内面は斜方向から横方向のハケである。口唇部、突帯にヨコナデを加える。ハケ原体は内外面異なり、条線は外9本/2cm、内12本/2cmである。器面色調は暗灰褐色を呈す。15は、朝顔形円筒埴輪である。現存高20.9cmを測る。突帯高は0.7cmである。外面整形は、縦方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。突帯、口唇部にはヨコナデを加える。ハケ条線は11本/2

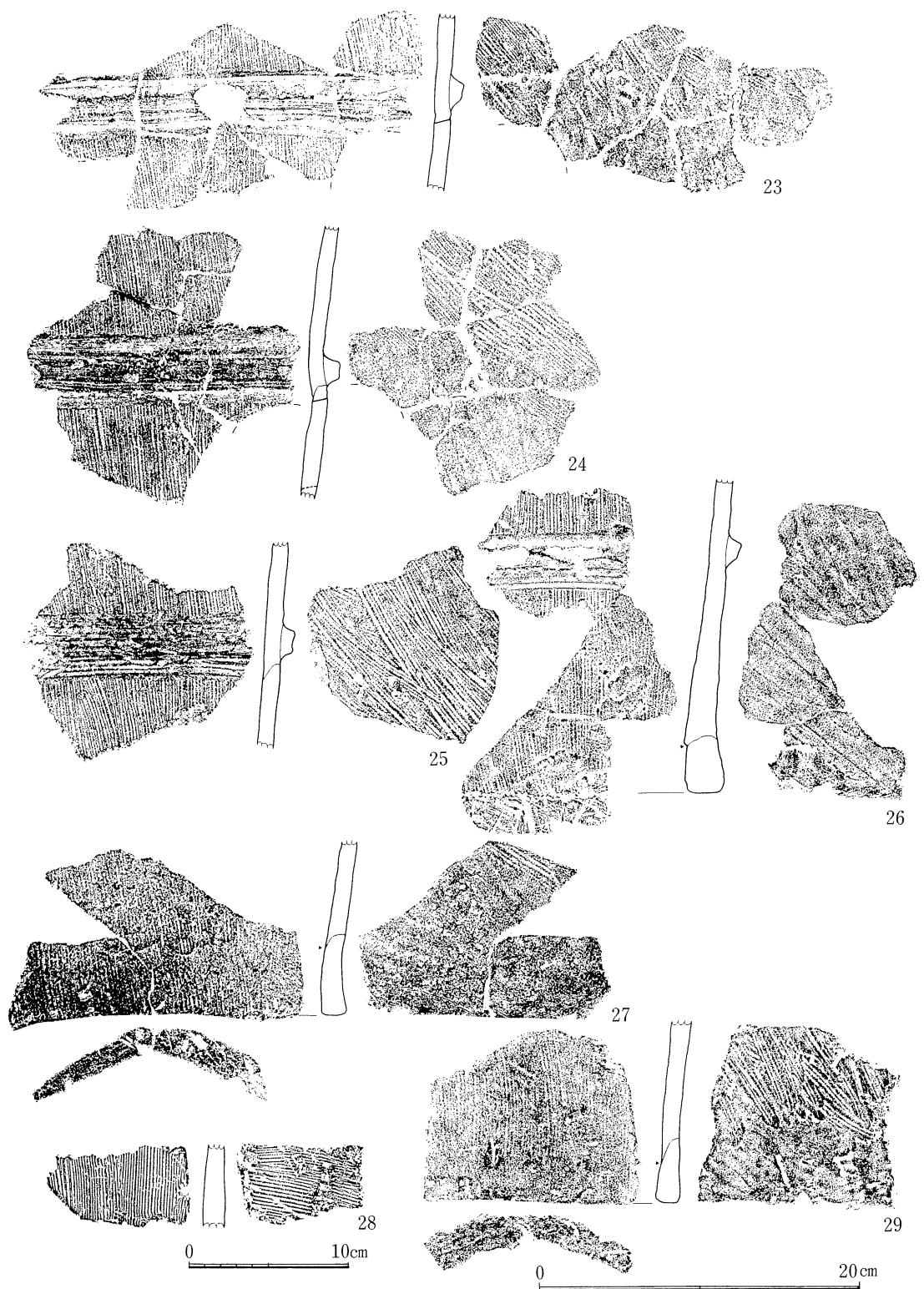


第14図 円筒埴輪(7)

cmである。器面色調は淡茶褐色～灰褐色である。16は、朝顔形円筒埴輪である。現存高はおよそ17.9cmである。突帯高は0.9cmを測る。外面整形は、縦方向のハケ、内面は横方向のハケであるが、施工具は2種あり、粗いハケで再調整を加える。また内面口唇部には縦方向のナデが観察できる。ハケ条線は、9本/2cmと7本/2cmである。器面色調は褐色を呈す。17は、普通円筒埴輪である。内面のハケ方向から、現存最上段は口縁部と考えられる。現存高30.3cm、突帯間上段高13.1cmを測る。透孔は確認できない。突帯高は1.0～0.9cmを測る。外面整形は、下から上への縦方向のハケであり、突帯部にヨコナデを加える。内面は斜方向から横方向のハケである。ハケ原体は内外面異なり、ハケ条線は外10本/2cm、内11本/2cmである。器面色調は淡茶褐色～暗灰褐色を呈す。18は、円筒埴輪中間段片である。現存高約15.3cmを測る。円形の透孔が確認できる。突帯高は0.9～0.8cmを測る。外面整形は縦方向のハケ、内面は斜方向のハケである。内外面のハケ原体は異なり、ハケ条線は外10本/2cm、内12本/2cmである。器面色調は褐色を呈す。19は、円筒埴輪中間段片である。現存高約17.8cm、突帯間高は12.8cm程度と考えられる。円形の透孔が確認できる。突帯高は1.0cmである。外面整形は、縦方向のハケ、内面は斜方向のハケである。内面ハケは、外面と同工具のものと、再調整と考えられる粗いものが観察できる。ハケ条線は、12本/2cmであり、内面再調整ハケは確認できない。器面色調は褐色である。20は、普通円筒埴輪口縁部と考えられる。現存高21.3cmを測る。口縁高は13.5cm以上となる。円形の透孔をもつ。突帯高は0.8cmである。外面整形は縦方向のハケであり、内面は左上りの斜方向からの横方向のハケである。ハケ施工具は内外面異なるが、ハケ条数は9本/2cmである。器面色調は灰褐色である。21は、円筒埴輪突帯部片であり、現存高は約12.2cmである。円形の透孔をもつ。突帯高は1.0cmである。内外面ともやや斜方向のハケをもつ。ハケ原体は異なり、外10本/2cm、内8本/2cmである。器面色調は褐色～灰褐色を呈す。22は、円筒埴輪中間段片である。現存高約12.2cmを測る。円形の透孔をもつ。突帯高は0.8cmである。外面調整はハケ、内面は下から上への指ナデである。ハケ条線は9本/2cmである。器面色調は褐色を呈す。23は、円筒埴輪突帯部片である。現存高は約11.2cmである。円形の透孔が確認できる。突帯高は0.9cmである。外面整形は、縦方向のハケであり、内面は下半は指ナデ、上半にハケをもつ。ハケ条線は11本/2cmである。器面色調は淡茶褐色である。24は、円筒埴輪突帯部片であり、現存高約17.0cmである。円形の透孔が確認できる。突帯高は1.1cmである。外面調整は縦方向のハケであり、内面は下半が指ナデ、上半部にハケをもつ。内面ハケは2種であり、外面と同じと考えられるハケののち、再調整として粗いハケを加える。ハケ条数は11本/2cmと8本/2cmである。器面色調は褐色を呈す。25は、円筒埴輪突帯部片である。現存高約13.0cmである。突帯高は0.8cmである。外面整形は縦方向のハケ、内面は左上りの斜方向のハケである。内外面ハケ原体は異なり、ハケ条線は10本/2cmと8本/2cmで



第15図 円筒埴輪(8)



第16図 円筒埴輪(9)



第17図 円筒埴輪(10)

ある。器面色調は暗灰褐色を呈す。26は、円筒埴輪基部である。現存高19.2cm、基部高15.3cmを測る。突帯高は0.8cmである。基底部は幅約3.8cmの粘土帯による。外面整形は、縦方向のハケであり、内面は斜方向の指ナデである。ハケ条線は9本/2cmである。器面色調は暗灰色を呈す。27は、円筒埴輪基部である。現存高10.8cmを測る。基底部粘土帯幅は5cmである。外面整形は、縦方向のハケである。内面は指ナデであり、上端にハケが観察される。ハケ条数は8本/2cmである。器面色調は褐色を呈す。29は、円筒埴輪基部である。現存高11.3cmを測る。基底部粘土帯幅は約4.0cmであり、底面に合せ目が観察できる。外面整形は縦方向のハケ、内面は指ナデ、斜方向のハケである。内外面ハケ原体は異なる可能性もあるが、条線は9本/2cmである。器面色調は褐色を呈す。30は、円筒埴輪基部である。現存高は25.0cm、基部高18.7cmである。円形の透孔をもつ。突帯高は1.0cmである。基底部粘土帯幅は6.3cmほどであり、底面に合せ目がみえる。外面整形は、縦方向のハケであり、内面は、斜方向の指ナデ、ハケである。ハケ条線は11本/2cmである。器面色調は褐色を呈す。31は、円筒埴輪基部である。現存高26.4cm、基部高は18.1cmである。円形の透孔をもつ。突帯高は0.6cmを測る。基底部粘土帯幅は5.0cmほどであり、底面に合せ目がみえる。外面整形は、縦方向のハケであり、内面は斜方向の指ナデ、原体の異なるハケである。ハケ条線は11本/2cmである。器面色調は褐色を呈す。32は、円筒埴輪基部である。現存高は14.8cmを測る。基底部粘土帯幅は約4.3cmである。外面整形は、縦方向のハケであり、内面は斜方向の指ナデ、ハケである。器面色調は褐色を呈す。33は、円筒埴輪基部である。現存高は11.0cmを測る。基底部粘土帯幅は約3.0cmである。外面整形は縦方向のハケ、内面は指ナデである。ハケ条線は10本/2cmである。器面色調は暗灰色を呈す。28は、体部小片であるが、他と胎土、ハケ等が明瞭に異なる。ハケは深くシャープであり、条線は15本/2cmである。胎土は密で、色調は明褐色、焼成は良好である。

全体の形状 ある程度復原できたものは、普通円筒埴輪が多く、朝顔形円筒埴輪は限られる。その比重は本来のものと考えられるが、比率を提示することはできない。また朝顔形円筒埴輪は、全体が復原できるものが1例もなく、各部各形状との対応関係は明らかではない。

普通円筒埴輪で、全体の形状が復原できたものは第8図-1であり、3突帯4段である。透孔は円形であり、中間段上段に2個1対が穿たれる。ただし、各部の形状、比率など、この1例において説明することはできない。

口径については、27.7～30.6cmを測り、ほぼ28.5cmを前後とし安定している。底径については、1が20.3cm、7が17.6cmであり、全体にゆがみがはげしいが、基本的に一定していると考えられる。これに対して、口縁高、突帯間高、基部高は明らかな相違が認められる。口縁部高は、計測可能なものは、10.4、10.5、11.4、12.6、12.8、15.3、15.6、15.7、16.2、16.4、18.6cmを測り、平均11.5cmと16cm前後のグループに大別される。突帯間高は、1を例にするならば、透孔をも

つ上段が9.6cm、無孔下段は10.7cmであり、2もこれにほぼ対応する。これに対して、3は13.5cm、17は13.1cmを測る。この相違は、すくなくとも透孔の有無に関連するものではない。また基部高は、1が15.6cm、26が15.3cmを測るのに対して、7・30・31は、各々18.8、18.7、18.1cmを測る。30・31については、基部直上の中間段に透孔がみられるなど、1とは異なる形状が想定される。また30・31は、透孔下端から突帯まで幅があり、1・2とは突帯間高も異なると考えられる。口縁部下の各部形状については、朝顔形円筒埴輪を考慮する必要もあるが、口縁部高をみても、2種の普通円筒埴輪が復原されるのである。仮に、口縁部高16.3cm、突帯間高13.3cm、基部18.5cmとした場合、全体高は48.1cmであり、これは3突帯4段の1に対応する。また30・31の透孔位置をも考慮するならば、2突帯3段の普通円筒埴輪の存在はほぼ妥当であると考えられる。この場合、3突帯4段は、1・2・3・11・12・14・26、2突帯3段は、4・5・7・8・9・10・13・17・19・30・31である。

各部の形状 口縁口唇部の形状は、基本的に、外方へやや屈曲し、内面屈曲部に稜をもつ。内面外傾面は、ヨコナデによりやや内湾するものもある。また端部は面をもち、ヨコナデにより両端がつまみだされ、中央が凹む。外傾面の幅に変化が認められるものの、比較的画一的である。ただし、5・10は全体がゆるやかに外傾し、5は端部が丸くなる。両者とも2突帯3段例であるが、全体としての対応関係は認められない。

透孔は、円形に限られる。3突帯4段については中間段上段に、2突帯3段のものについては中間段に、2個対向して穿たれる。孔径は、2では、左右約6.5cm、上下5.7cmを測る。透孔は、ハケ整形、突帯付設ののち切り抜かれる。切り抜きにともなう粘土のはみだしはあまりみられず、軽くナデが施されるとも考えられる。

突帯については、台形を基調とする。土師質のものについては、焼きが悪く、稜線が丸くなっているものが多いが、須恵質のものについては、中央面がやや凹み、とくに上端の稜線は比較的するどい。突帯高は0.6～1.1cmを測り、0.8～0.9cmが多い。個体ごとに若干の相違はみられるが、類別化することはできない。

成 形 基部は、1枚の板状粘土をまるめ、一定の径に定め、その上に粘土紐をつみあげる。基部粘土帯幅は、3.8～6.3cm程度である。その上の粘土紐との間に、明瞭な接合痕を残すものは少ない。粘土紐については、幅2cmを前後すると考えられるが、接合痕を残すものが比較的少なく、確認できない。積み上げ方向については、上からみて半時計回転(内面左上り)の接合痕の傾斜が認められる例もあるが、全体として明確な傾向は確認できない。

整 形 器面整形方法は、ハケ、指ナデ、ヨコナデによる。このうち、内外面の基本的な整形方法であるハケ、指ナデは、下から上へ、上からみて時計回転の順に施される。外面は、口唇部、突帯に施されるヨコナデをのぞき、最終的な調整はハケに限られる。内面は、基部に

については指ナデが一般的であり、2・11は指ナデが全体におよぶ。基本的には、斜方向、口縁部は横方向のハケであり、2・11は、これを省略したものとも考えることもできる。内外面のハケは、施工工具が異なる場合がほとんどであり、外面に対して内面は深く粗い場合が多い。また、内面局所的な再調整として、施工工具の異なるハケ、指ナデを加える例もある(3・9・19)。ハケ原体条線密度は、外面は9～12本/2cmが多く、内面は9本/2cmをほぼ平均とする。ただし、同一工具を認定することはできなかった。基部について、重量に伴う、ゆがみの補正を目的とするような再調整は確認できない。

製作工程 本古墳の円筒埴輪は、半乾燥過程を単位とする、小工程ごとの分割整形は基本的に認められず、小工程分割に伴う、接合痕、ハケ断続部の補正を目的とする二次調整も確認できない。また突帯上下でのハケの非連続も基本的に認められない。外面ハケ、内面ハケ、指ナデは、口縁部までの成形、略整形ののち、一気に施されたものと考えられ、その後に突帯の付設、そして透孔の切り抜きがおこなわれる。突帯については、突帯部内面のハケがおさえにより不明瞭になる傾向が確実に認められ、このことは、内面についても最終整形ののちに突帯が付設されたことを傍証する。ただし、内外面のハケ原体が異なる場合が多い点は、視覚的な要因とともに、工程が異なる可能性も否定できない。3・9では、内面の積み上げ痕に対応してハケが断続し、さらに再調整が加えられる。突帯の剥落がみられない点、基底部が大きくゆがむ点など、明確な時間差、半乾燥期間を想定することはできないが、例えば1・2などは、特定部分のみ明瞭な積み上げ痕をのこしている。一括的な整形が基本ではあるが、とくに内面については、短期間の半乾燥をはさむ分割整形が認め得る可能性も考えられる。外面についても、17下突帯は、上下でハケが連続しない可能性がある。なお、朝顔形円筒埴輪口縁部については、その外方へ開く器形から、半乾燥過程をはさむ、小工程ごとの分割整形が確実に認められ、とくに15はその痕跡が明瞭である。その外面整形は、突帯位置やや上まで積み上げたのち、ハケ、突帯貼り付け、ヨコナデが行われ、さらにその上方への粘土紐の積み上げののち、突帯直上からハケを加え、突帯へ再度ヨコナデを施す。そして、口唇部も工程がわかる。

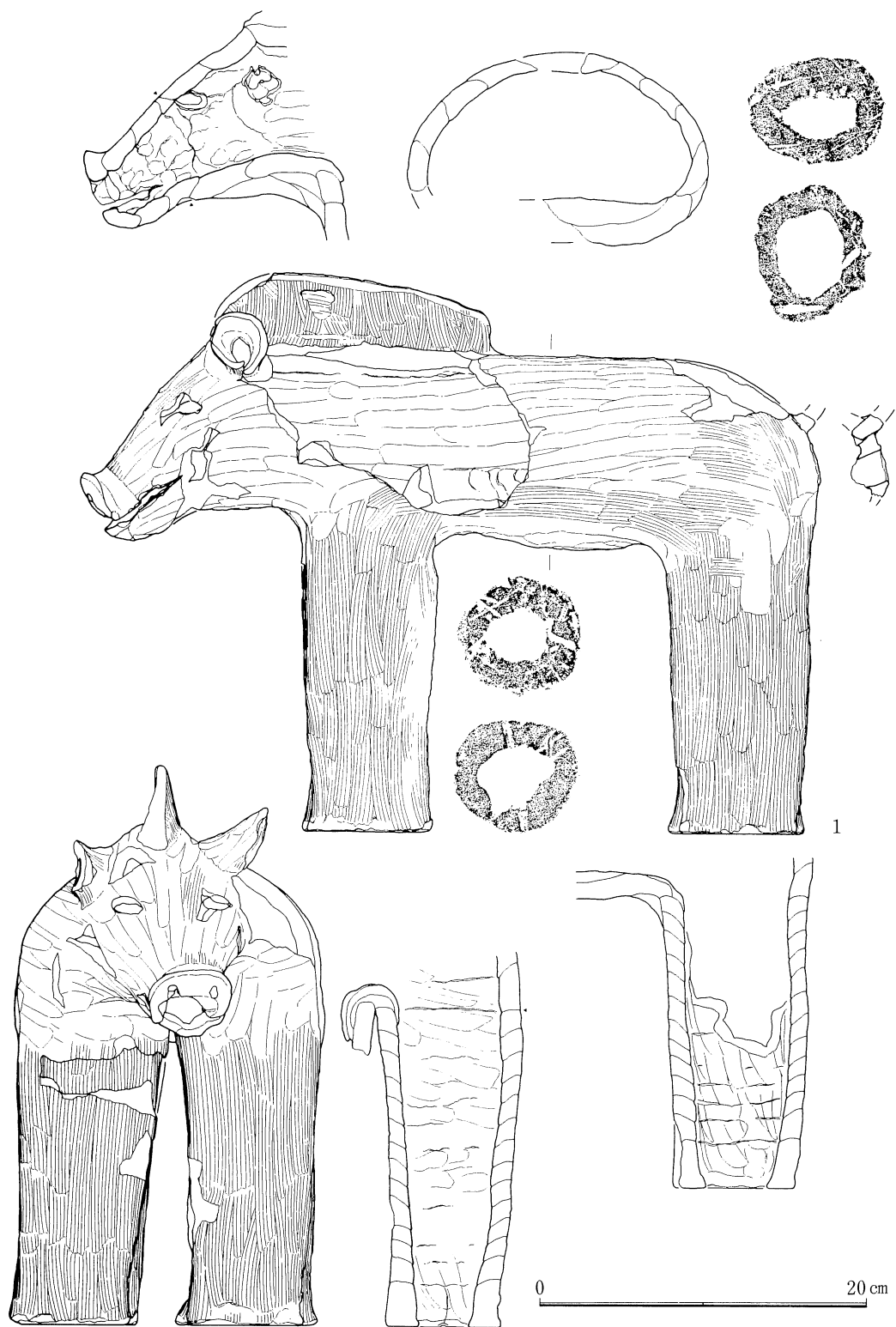
胎土・焼成 胎土については、後述する形象埴輪を含め、明瞭な相違は認められない。全体に密度が粗く、長石、石英を多量に含む。今後、資料が増加した段階で、委託分析する必要がある。焼成については、窖窯によるものと考えられ、黒斑は認められない。器面色調を大別するならば、褐色～淡茶褐色～暗灰褐色に分類される。細片を除く出土円筒埴輪3815点のおおよその比率は、褐色のものが2031点(53.2%)、須恵質のものが1784点(46.8%)である。

b. 形象埴輪(第18～22図 図版10～12)

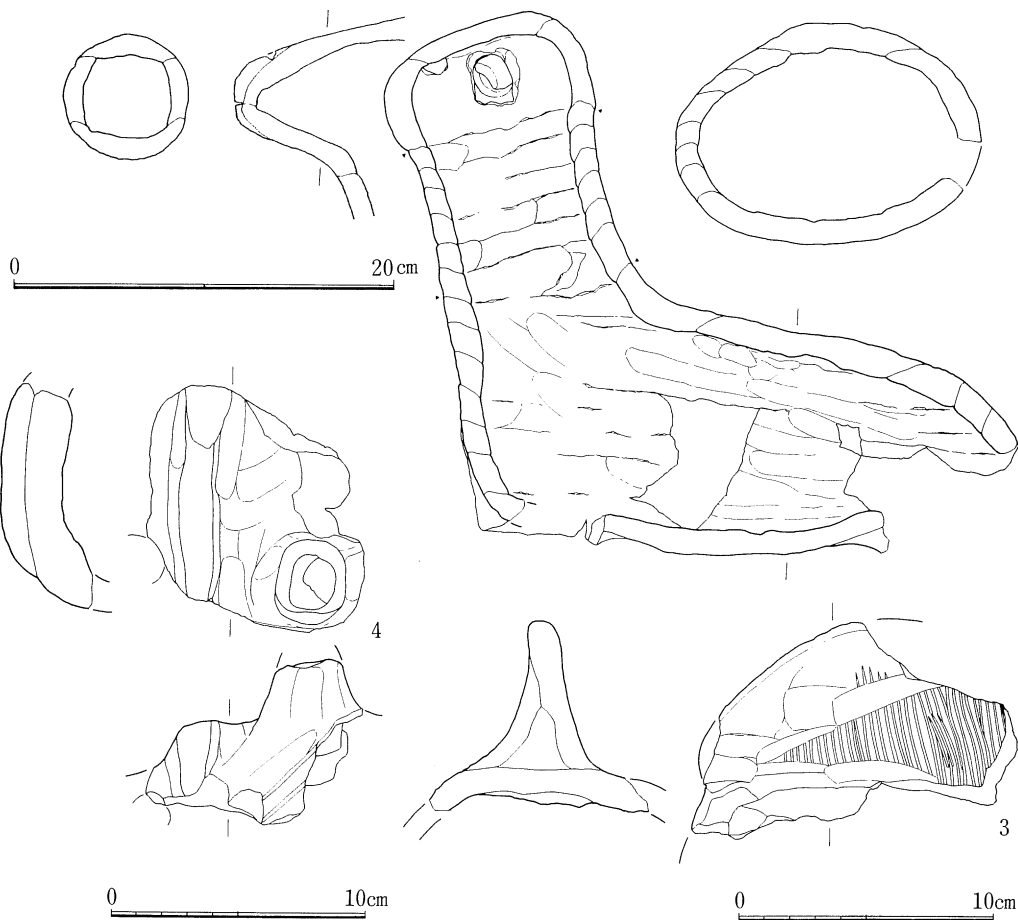
今回の調査で出土した形象埴輪は、人物形埴輪、馬形埴輪、猪形埴輪、鹿形埴輪、鶏形埴輪

であり、他に全体の形状、部位等不明な細片が認められるものの、全体の構成は限られ、いわゆる器財形埴輪は1例も存在しない。ただし、全体の形状が復原できた個体もあり、以下製作技法等も考慮し記述する。

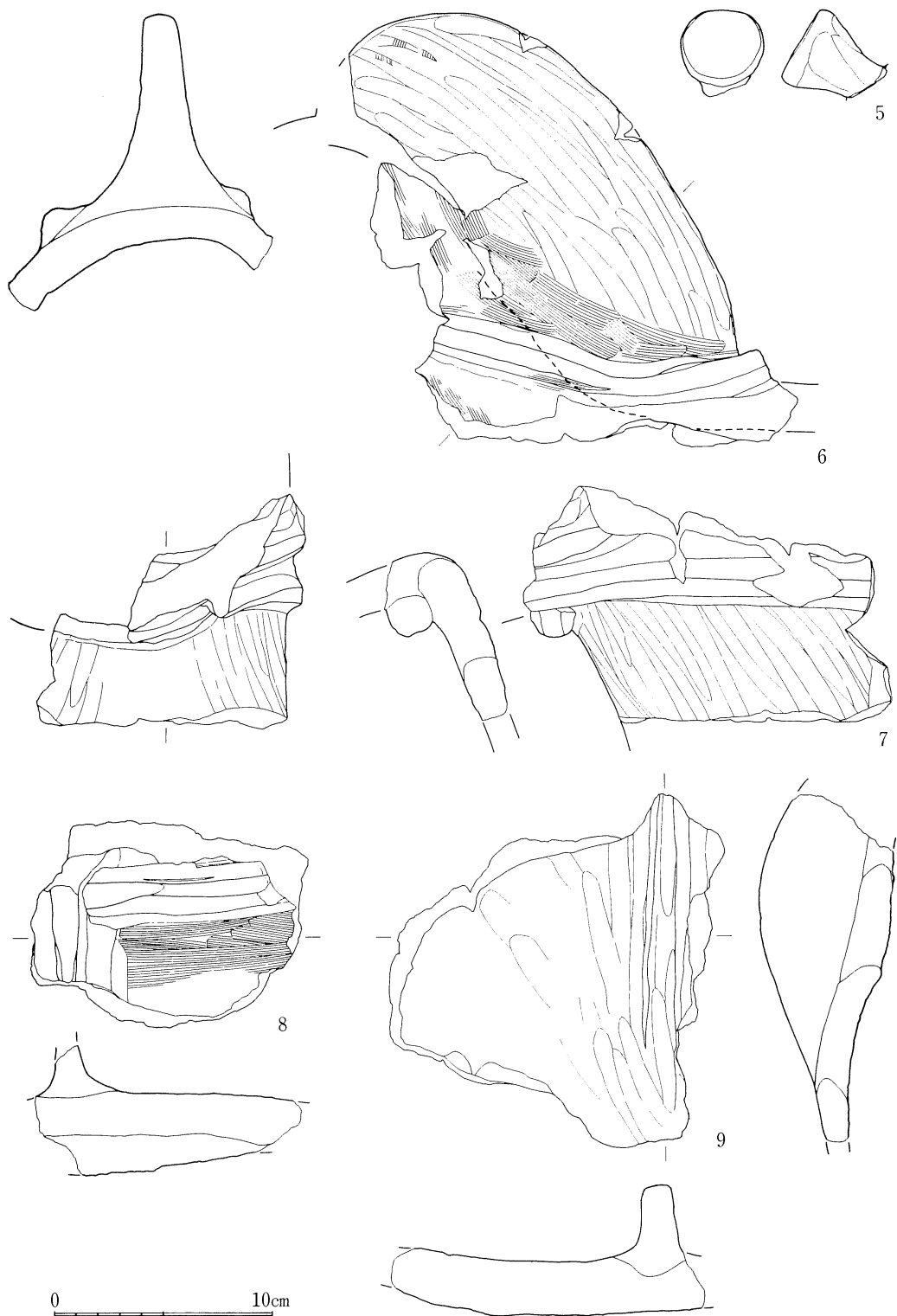
1は、猪形埴輪である。頭をやや横に向け、背毛を立てている。高さ34.4cm、現存長45.6cm、最大幅19.1cmを測る。胴部を欠損するものの、ほぼ全体が復原されている。器面色調は暗灰褐色を呈し、内面、脚一部は褐色になる。焼成は良好。胎土は長石等白色細粒を多量に含む。脚部は、幅3～4cmの粘土板を1～2枚巻き合わせ基部をつくり、その上に幅1～1.5cm程度の粘土紐を積み上げる。外面はハケ、内面下半は下から上への指ナデ、上半はヘラナデによる。製作時における脚部高は、約19cmである。整形まで完成した脚は、数枚の粘土板を橋渡しするように補い合体される。前後脚間下腹部は、数枚の厚手の粘土板による。そのうち腹部が積み上げられていくが、その粘土紐は脚部に対して幅広である。内面の整形はヘラナデ、指ナデ、外面は、脚接合部下より下腹部にハケを用いる他、ヘラナデである。最後に背部に幅約6cmの粘土板でふたをする。頭部については、粘土紐の積み上げ方向が逆であり、別に円筒状につくったのちに合体され、鼻部、額部を粘土板でふたをする。背毛は、そののちに接合させる。頭部の整形は、ハケののち、接合後にヘラナデが加えられる。耳、尾については、貫通孔に、粘土板をまるめたもの、棒状のものを挿入する。また口面側面には、牙を挿入した痕跡が認められるが、脱落している。2は、鹿形埴輪である。首をたて、頭をやや横に向ける。脚部を欠損する。現存高28.2cm、現存長36.9cm、最大幅16.8cmを測る。器面色調は、頭部から首にかけて灰褐色、胴部は淡茶褐色～褐色を呈す。焼成は良好。胎土は1と同様である。製作工程は現存部で3工程に分割される。下腹部は、1枚の粘土板からなり、その上に粘土紐を積み上げていく。背部を粘土板でふたをしたのち、首部粘土紐を積み上げていく。頭部については、粘土板を貼り合わせるようにしてつくる。耳は1の猪形埴輪と同様に製作されている。外面整形は、下腹部はヘラナデ、指ナデによる。胴上半部から頭部にかけては、略整形ののち、一括してハケが施されたものと思われる。首の前後は、その後にヘラナデを加える。胴部内面は、ヘラナデ、指ナデ。首から頭部については、指頭によるおさえ痕はみられるものの、明確な整形痕はみられず、粘土紐積み上げ痕を残す。3は、猪形埴輪である。現存高8.7cmを測る。器面色調は褐色を呈す。背毛は、1に比して幅広であり、中央粘土塊に対して、粘土板を貼り合わせる。ハケにより背毛を表現するが、上半部はヘラナデ、ヨコナデが加えられる。内面は指頭痕の他、明瞭な整形痕を残していない。4は、馬形埴輪額部であると考えられる。目の一部、片方の耳を遺存する。額部突帯は面繫を表現したものと考えられる。現存高6.6cm、器面色調は褐色を呈す。内外面とは器面状態は不良であるが、外面整形は指ナデ、ヘラナデによるものと思われる。耳は、貫通孔に粘土板をまるめたものを挿入し、外面接合部周囲に粘土を補充する。5は、



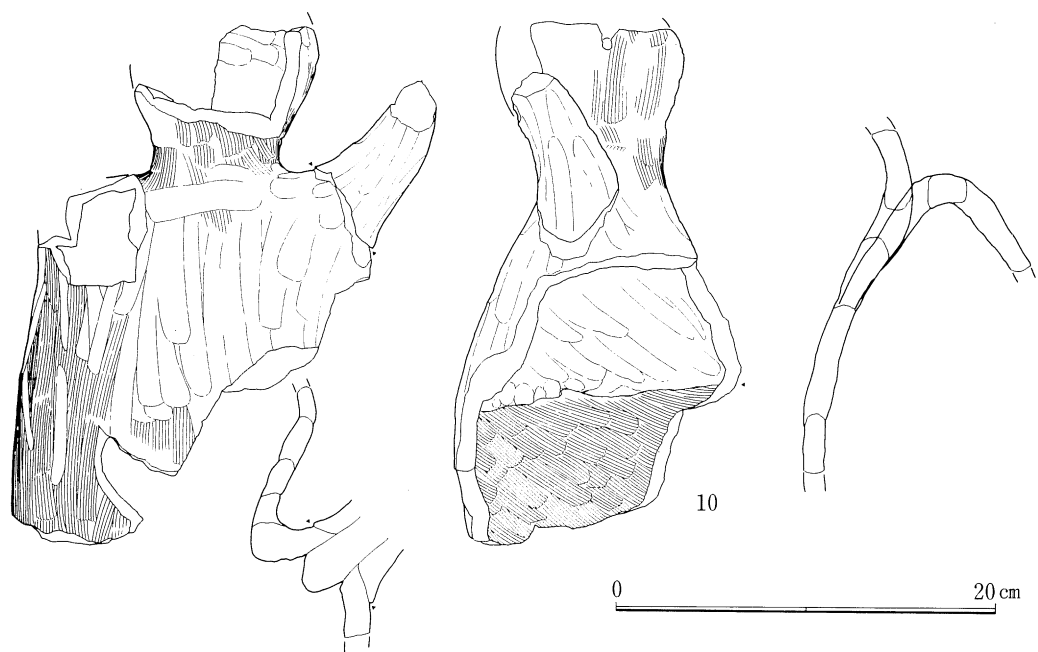
第18图 形象埴輪(1)



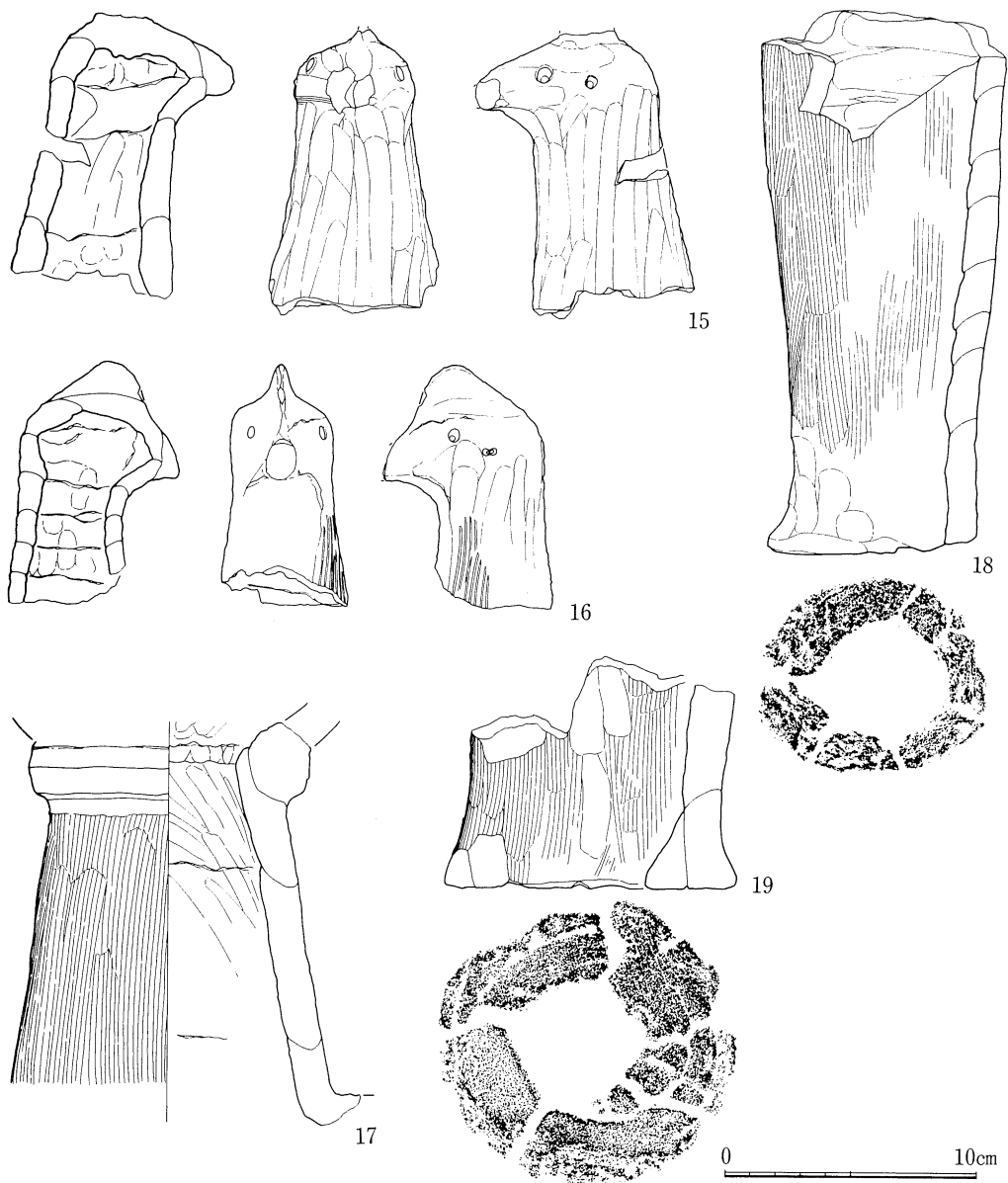
第19図 形象埴輪(2)



第20図 形象埴輪(3)



第21図 形象埴輪(4)



第22図 形象埴輪(5)

馬形埴輪の立髪先端の結び飾りと考えられるが、他に、人物埴輪の美豆良などが想定される。径3.8cmを測り、色調は褐色を呈す。器面は指ナデにより整形される。6は、馬形埴輪立髪部分であると考えられる。現存高は19.9cmを測る。色調は褐色を呈す。突帯は手綱を表現するものと考えられる。器面外面は、ハケを前提とするが、立髪部分はヘラナデが加えられ、表面的な表現を伴わない。内面は指ナデによる。立髪断面は観察できないが、3と同様であると思われる。7は、馬形埴輪の胸から頸部にかけてと考えられる。2本の突帯がみられるが、下の

突帯顎は部を圍繞する。手綱ではなく胸繫であろうか。現存高10.9cmを測る。色調は褐色を呈す。外面は幅のせまいヘラナデ。内面は指頭痕が残り、一部ヘラナデ痕が観察される。8・9は、馬形埴輪の鞍と考えられる。8は前輪と胸繫、9は前後不明であるが障泥を中心とする。両者とも覆輪等細部の表現は省略されている。8は現存高9.5cm、淡茶褐色を呈す。外面はヘラナデ状のハケ整形ののち、突帯、ヨコナデが加えられる。内面は横方向のヘラナデである。9は現存高16.1cm、褐色を呈す。内外面とも器面状態が不良であるが、ナデによるものと考えられる。10は、人物埴輪である。現存高27.7cmを測る。器面色調は淡茶褐色～褐色を呈す。胴部中位により工程がわかれ、下部については幅2～3cmの粘土紐を積み上げて成形する。胴部上半については、幅広の粘土板を前後2枚、上下3枚合わせ、腕、頭挿入部をのぞき、肩部で前後を接合させる。頭部はその後に粘土紐を積み上げる。腕は、棒状粘土に粘土板をまきつけて胴部へ挿入する。外面の整形は、ハケ整形ののちヘラナデを施し、内面に対応するハケの断続は認められない。内面胴部下半はハケ、胴部上半から頭部はヘラナデである。11は、人物埴輪である。頭部2/3が遺存する。現存高11.6cmを測る。色調は淡茶褐色を呈す。基本的な成形は、幅広の粘土板をまるめ、顎部等は、粘土板を重ねることにより表現する。鼻は剥落している。頭部は帽子をかぶるが、その全体の形状は不明である。目・耳・口は、切り抜かれている。外面整形はヘラナデであり、後頭部にハケが観察される。内面の指ナデによる。12は、人物埴輪頭部である。現存高5.9cmを測る。器面色調は淡茶褐色を呈す。頭頂部は島田鬘を表現するものと考えられる。また耳と考えられる穿孔が確認できる。外面整形は、ハケののちヘラナデ、内面は指ナデである。13は、人物埴輪顔部である。現存高6.3cmを測り、器面色調は褐色を呈す。左下部分は粘土板が1枚剥落し、下の整形痕がみえる。口は切り抜かれ、鼻の穴は棒状工具の刺突による。14は、人物埴輪腕部である。現存長12.0cmを測り、褐色を呈す。棒状粘土を芯とし、器面整形はヘラナデである。15・16は、鶏形埴輪である。15は、現存高11.6cmを測り、器面色調は褐色を呈す。鶏冠とくちばしを欠損する。成形は粘土板をまき上げ、頭頂部を粘土板でふたをする。鶏冠は粘土をつまみ出し、くちばしは粘土塊を貼りつける。目は棒状工具を刺突し、内面まで貫通していない。外面はヘラナデ、内面は指ナデにより調整する。16は、現存高9.6cm、器面色調は褐色を呈す。くちばしを欠損する。16に対して幅の狭い粘土紐を積み上げ、鶏冠も粘土を補充する。内面は整形痕はみられず、外面はナデの他、ハケ条線が一部観察できる。17は、人物埴輪の脚とも考えられるが、粘土紐の積み上げ方向、整形方向は上下逆である。現存高は16.4cm、器面色調は褐色を呈す。18・19は、脚部である。18は現存高21.8cm、器面色調は褐色、19は現存高9.4cmで淡茶褐色を呈す。ともに蹄の表現はみられない。

(2) 土器

周溝内出土土器

前述したごとく周溝内出土遺物中には、古墳築造時期を指すものは埴輪以外にはなく、周溝内出土土器として取り上げたものは、周溝前方部に周溝外から廃棄された状況で検出された奈良～平安期の土器と、若干の古墳築造以前の土器である。

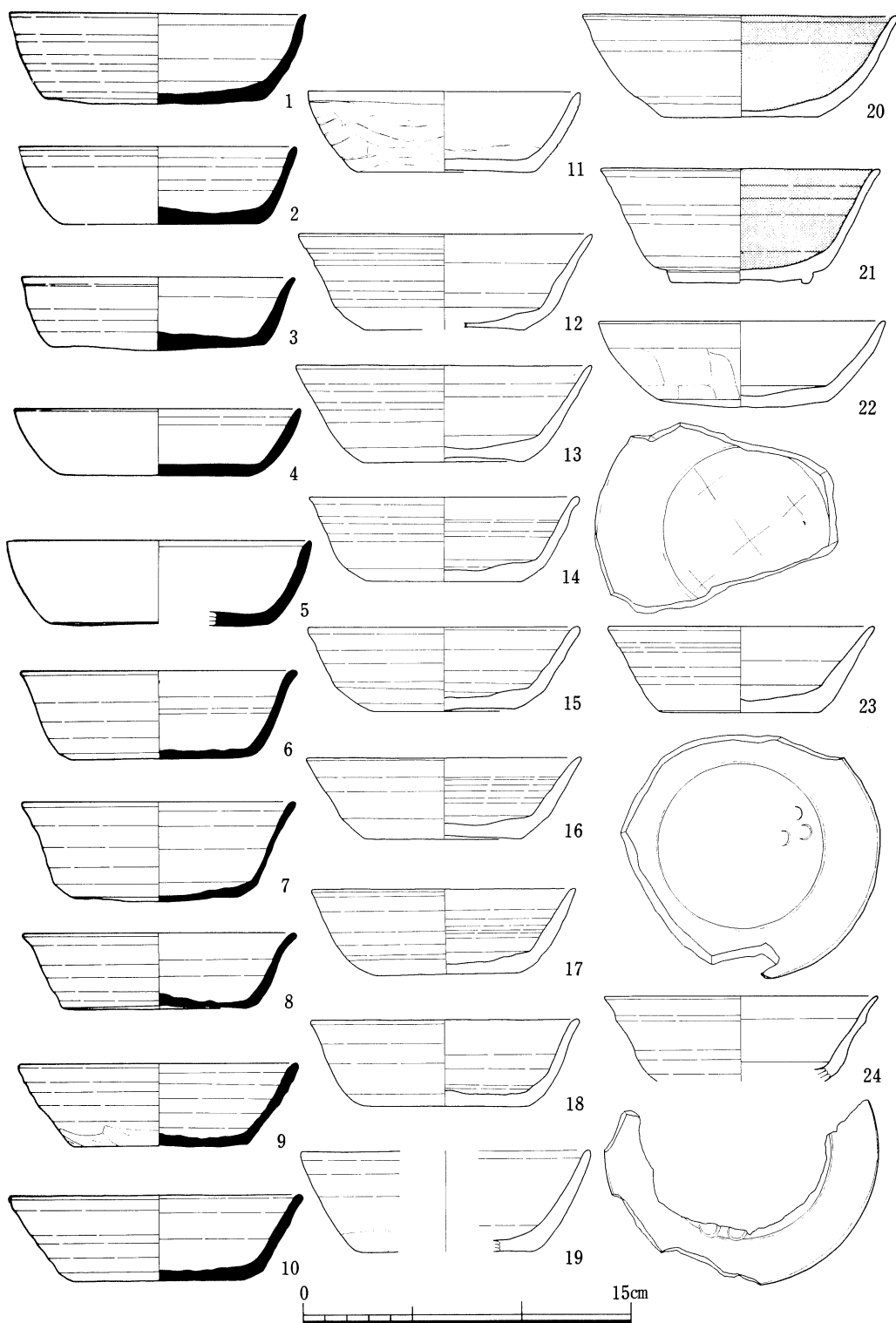
1～10は、須恵器坏である。1～5は、底部に回転篋削り成形を施し、1には回転糸切り離し痕跡を認める。胎土は全体に細密で、2mm前後の黒色粒が見られる。焼成には良・不良があり、同一固体で還元炎と酸化炎焼成部分を共存するものも存在する。口径12.5～13.6cm・器高3.1～3.9cm・底径8.7～10cmを計り、それぞれの平均値は口径13.06・器高3.62・底径9.46cmである。

6は、体部下端と底部に回転篋削りを施す。7～9は、底部に一方向の篋削りを残す。9の体部下端には手持ち篋削りを施し、10は体部下端と底部に回転篋削りを施した後に底部周縁を手持ち篋削りを行う。口径12.6～13.6cm・器高3.8～4.6cm・底径7.8～8cmを計り、平均値は口径12.88・器高4.1・底径7.88cmである。器形は口縁が外反ぎみに立ち上がり、体部に輪積痕跡を明瞭に残す。胎土は全体に1mm前後の白色砂粒を含む。焼成は、やや暗い灰色や暗黒褐色を程し、十分な還元炎焼成が行われていない。

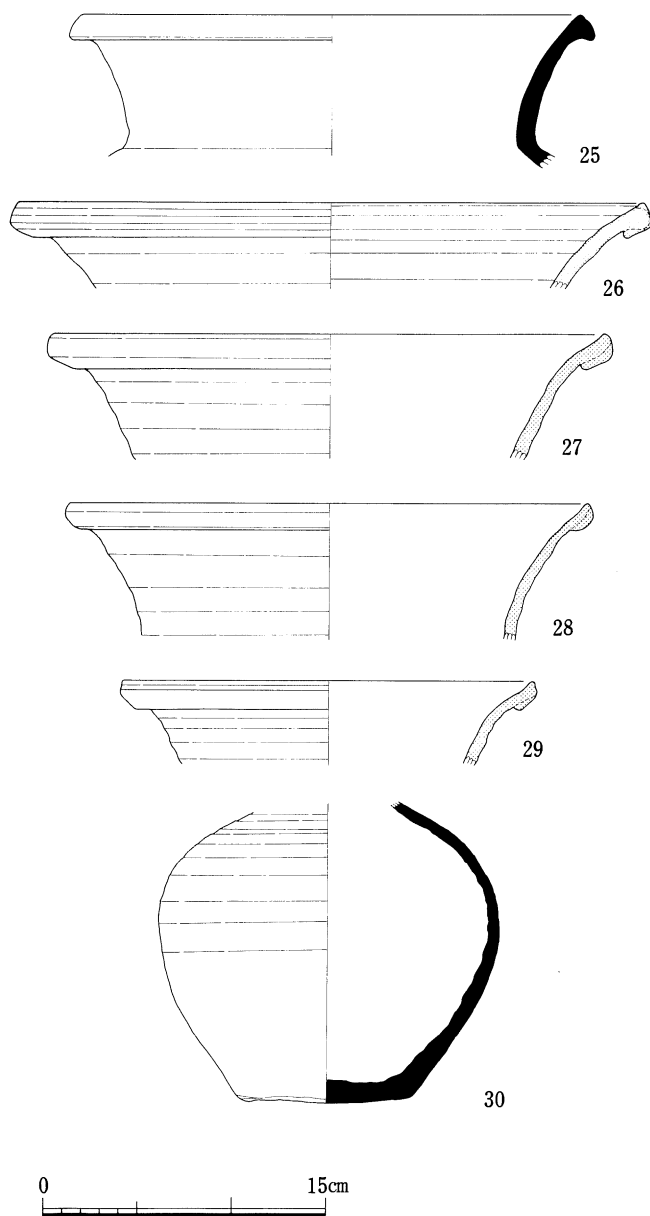
12～21・23・24は、ロクロ土師器である。12～18は体部下端及び底部に回転篋削りを施し、19は体部下端手持ち篋削り、23は底部に回転篋削りを施すものの回転糸切り離しを認める。また23・24の内面底部には、半裁竹管の指突文を施す。20・21は内面黒色処理を施し、21には断面角状の口台を有する。20は体部下端及び底部に回転篋削りを施し、内面は丁寧に磨かれる。12～18は、口径12.2～13.5cm・器高3.7～4.4cm・底径6.6～7.5cmで、平均値は口径12.73・器高4.04・底径7.16cmである。焼成は良・不良があり、十分な酸化炎焼成が行われるものと暗褐色を程するものが存在する。

11・22は、土師器坏である。体部・底部ともに手持ち篋削りを施し、22はやや底部が出尻ぎみで、内面底部に線刻によって×印を表現している。

25～29は、須恵器広口壺である。25は、還元炎焼成も充分に行われているが、26～29は還元炎焼成が不十分なものである。26～29は口縁部を折り返し、または張り付けて肥厚させ、口唇部は丸くあるいはつまみぎみになったりさまざまな様相を程する。頸部器表面には、輪積み痕跡を明瞭に残している。30は、二段構成の長頸壺で頸部から口縁部を欠く。還元炎焼成が充分に行われ、肩から胴中位の一部に自然釉がかかる。また、頸から胴中位には篋状工具の先端と考えられる回転圧痕を明瞭に認められる。31～35・37～38は須恵器甕もしくは甗であろう。口縁部は折り返しあるいは張り付けで肥厚となり、大きく外傾し開く。口唇部は、つまみ上げ直



第23図 土器(1)



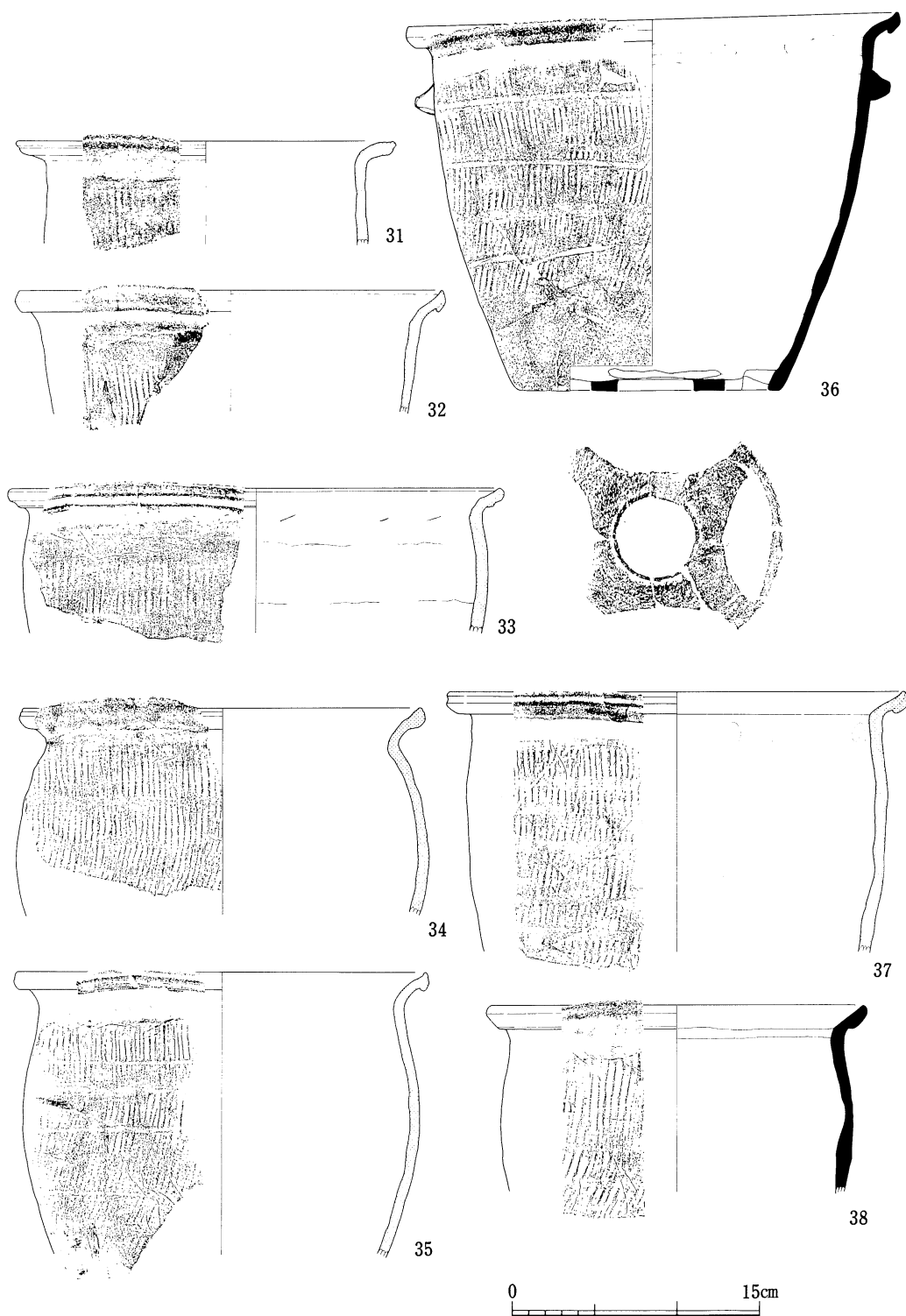
第24図 土器(2)

ある。いずれも周溝前方部の奈良～平安期の土器出土範囲内から検出され、後世の廃棄遺物である。

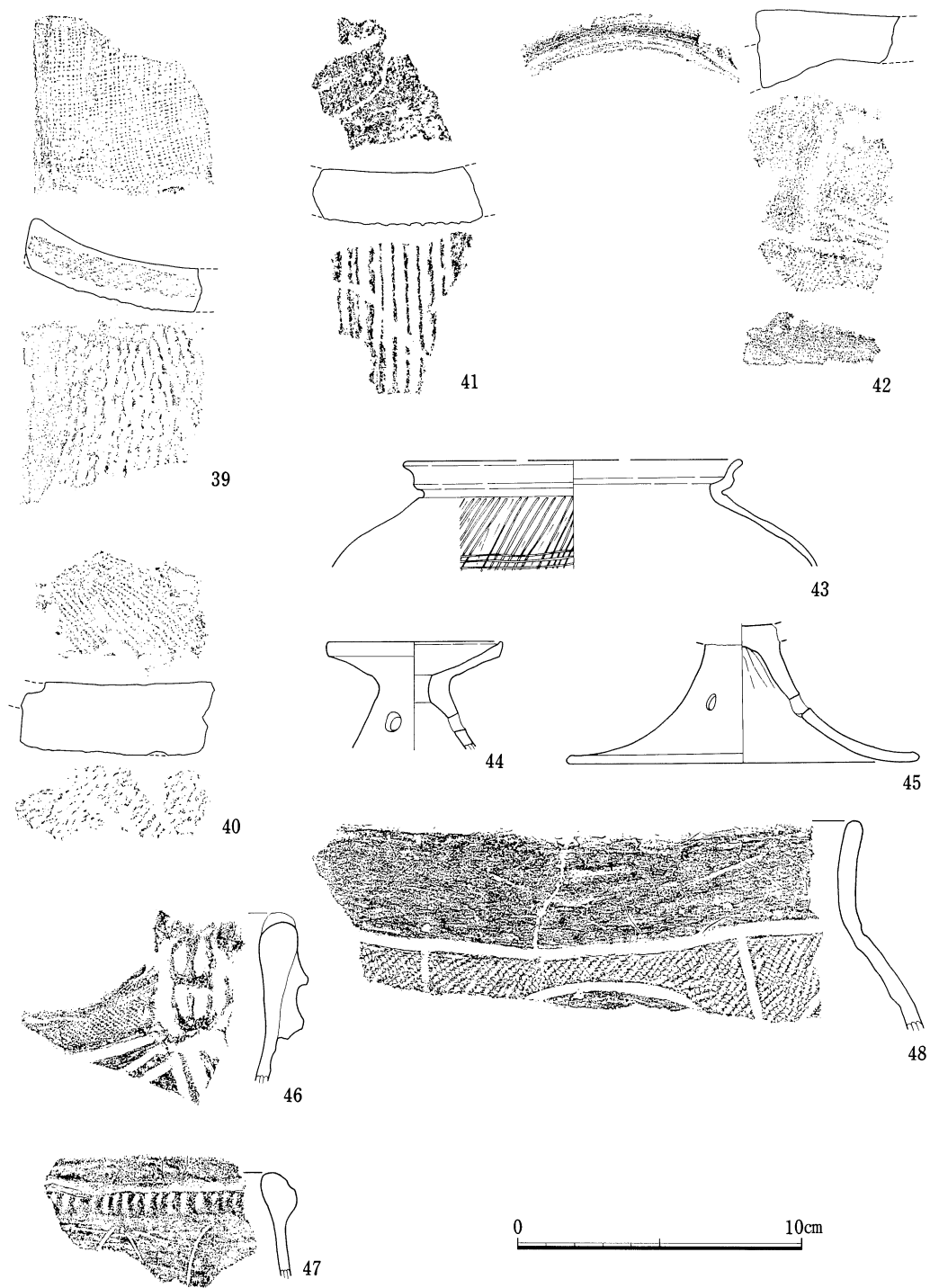
43～45は古墳時代前期の土師器で、43・45は墳丘下旧表土中、44は周溝内からの出土である。43はS字状の有段口縁台付甕で、口縁直下の屈曲部に沈線がめぐり、口縁立ち上がりがさほど

立ぎみのもの、丸く収めるものとさまざまである。胴部は、中位に最大径を持ち丸身を有するもの、直線的に下降するものが存在し、器表面には縦方向の平行タタキ目を施し、横位の沈線でととのえている。焼成は不十分な還元炎焼成が大半であるが、38は充分で濃い青灰色を程する。32は、胴部がすぼまりながら下降することから甕器の可能性が大きい。36は須恵器甕で、1/2の遺存である。口径25cm・器高28cm・底径16cmを計る。口縁は大きく開き張り付けされ肥厚し、口唇部はつまみ上げ、直立ぎみに立ちあがる。底部中央には径4.7cmの円孔と周辺にそって半円弧状の5孔を有する。胎土は2mm前後と大きめの砂粒を含み、焼成は還元が充分に行われている。

39～42の瓦は、39～41が平瓦・42は丸瓦で、39・40・42は須恵質・41は土師質で



第25図 土器(3)



第26図 土器(4)

挿図 番号	種類 器種 遺存率	法 量 ()推定 cm	特 徴	胎 土 焼 き 色 調	13	ロクロ土師 坏 1 / 3	口 13.5 高 4.3 底 7.5	体部下端に篋削り。 底部は回転篋削りを 施す。	細密 不良 淡赤褐色
1	須恵器 坏 ほぼ完存	口 13.6 高 4.1 底 9.8	底部は回転篋削りを 施し、回転糸切り離 痕を残す。	細密 不良 淡灰色	14	ロクロ土師 坏 3 / 4	口 12.4 高 3.9 底 7.0	体部下端に篋削り、 底部は回転篋削りを 施す。	細密 不良 淡赤褐色
2	須恵器 坏 2 / 3	口 12.7 高 3.6 底 9.2	底部は回転糸切り後、 回転篋削りを施す。	細密 不良 暗灰色	15	ロクロ土師 坏 1 / 2	口 12.5 高 3.9 底 6.6	体部下端に2段に、 底部に回転篋削りを 施す。	細密 良 淡黒褐色
3	須恵器 坏 ほぼ完存	口 12.5 高 3.4 底 9.6	底部は回転糸切り後、 回転篋削りを施す。	細密 不良 淡灰色	16	ロクロ土師 坏 1 / 3	口 12.6 高 3.7 底 7.2	体部下端と底部は回 転篋削りを施す。	細密 良 明褐色
4	須恵器 坏 1 / 3	口 (13) 高 3.1 底 (8.7)	口径に比して器高が 低い底部は回転篋削 りを施す。	細密 不良 淡灰色	17	ロクロ土師 坏 2 / 3	口 12.7 高 4.1 底 6.6	体部下端と底部は回 転篋削りを施す。	微砂粒含 良 淡褐色
5	須恵器 坏 1 / 3	口 (13.5) 高 3.9 底 (10)	底部は回転篋削りを 施すも底部中心を欠 き糸切りの有無は不 明。	細密 普通 淡灰色	18	ロクロ土師 坏 1 / 3	口 (12.2) 高 4 底 7.5	体部下端と底部は回 転篋削りを施す。	砂粒含 普通 暗褐色
6	須恵器 坏 1 / 3	口 12.7 高 4.2 底 8	底部は回転篋削りを 施す。	微砂粒含 普通 黒灰色	19	土師器 坏 1 / 3	口 (13.3) 高 4.7 底 8	体部手持ち篋削り、 底部は不明。	砂粒含 普通 暗褐色
7	須恵器 坏 2 / 3	口 12.7 高 4.6 底 7.8	底部は一方方向の篋削 りを施す。	微砂粒含 普通 黒灰色	20	土師器 坏 1 / 2	口 14 高 4.8 底 7	底部回転篋削りを施 す。	細密 良 暗褐色
8	須恵器 坏 3 / 4	口 12.6 高 4 底 7.8	底部は一方方向の篋削 りを施す。	微砂粒含 普通 黒灰色	21	ロクロ土師 高台付坏 ほぼ完存	口 12.8 高 5.2 底 6.4	底部に断面角状の高 台を有す。	微砂粒含 良 明褐色
9	須恵器 坏 1 / 2	口 12.8 高 3.8 底 8	底部は一方方向の篋削 り、体部下端に手持 ち篋削りを施す。	微砂粒含 普通 黒灰色	22	土師器 坏 1 / 3	口 (13.1) 高 4 底 7.8	体・底部手持ち篋削 りを施す。内面底に線 刻みで×印有り。	微砂粒含 普通 明褐色
10	須恵器 坏 2 / 3	口 13.6 高 3.9 底 7.8	体部下端と底部に回 転篋削りを施した後、 底部周縁手持ち篋削 り。	微砂粒含 普通 黒灰色	23	ロクロ土師 坏 1 / 3	口 (12.2) 高 4 底 7.2	底部は回転糸切り離 後、回転篋削りを施 す。半裁竹管指突文。	微砂粒含 普通 淡赤褐色
11	土師器 坏 2 / 3	口 12.4 高 3.7 底 8.2	内面は荒い磨きを施 し、底体部には手持 ち篋削りする。	微砂粒含 良 暗茶褐色	24	ロクロ土師 坏 1 / 2	口 (12.6) 高 3.9 底	内面底部に半裁竹管 指突文。	微砂粒含 普通 淡赤褐色
12	ロクロ土師 坏 1 / 3	口 (13.2) 高 4.4 底 7.3	体部下端と底部は回 転篋削りを施す。	細密 不良 淡赤褐色					

奈良～平安期の須恵器坏・ロクロ土師観察表

広がらない。また胎土は砂粒と雲母粒を含み、色調は白褐色を呈している。口縁径は約15cmを測る。赤塚次郎氏編年のB類からC類への過度期の遺物として理解できようか。44は小型器台で、口縁径は4.8cm、脚に3孔を有する。45は高坏脚部で、脚径15.6cmを計り、脚に3孔を有する。脚端は大きく外反し、やや上方へ反り気味である。

46～48は縄文式土器で、46・47は墳丘下旧表土中、48は周溝内覆土中からの出土である。46は安行3a、47は安行2、48は加曽利B2式であろうか。

IV ま と め

今回の調査実施にあたっては、現状では富士浅間神社を祭る『塚』が、古墳か否かの判定も問われ、試掘調査で埴輪片が検出されたものの、地元古老の中には四十数年前に塚の盛り土を行なった方々も居られ、調査実施に至るまでの関係諸機関のご苦勞が推察される。

調査の結果、塚は古墳を改変したものであった。古墳は、円丘部に台形の突出部を有し、帆立貝型の形状を呈することが確認された。当遺跡の位置する養老川河口域低地部での調査は、周辺の台地上に比べると僅かにすぎないが、今回の御座目浅間神社古墳のように塚に改変されたり墳丘を失った古墳の存在も十分に考えられる、また生産基盤としての集落跡等の存在も台地上同様に考えられ、今後こうした低地部での調査の積極的な対応が望まれよう。

前述したごとく、養老川河口域右岸での埴輪を有する古墳は、国分寺台地上の国分寺台350号墳・持塚一号墳・南向原四号墳・西谷十号墳・根田(代)一号墳・山倉一号墳、また海岸平野に所在するものとして君塚一号墳(君塚天神山古墳)の数例が知られるのみである。

国分寺台350号墳は、国分寺台持塚古墳群中に所在し、古墳を改変した塚で部分的な調査が行われ、現在は公園内に保存されている。調査は、市原市教育委員会と早稲田大学考古学研究室がそれぞれ行い、径28mほどの円墳と推定されているが、部分的な調査であることを考えると造り出しの可能性もある。資料は未公表であるが、出土埴輪には円筒形・朝顔形・家形・楕形・馬形等の形象埴輪があり、作りの丁寧な横ハケを有するものが多いことから国分寺台最古の埴輪として考えられている。

持塚一号墳は部分的な調査により、直径39.7mほどの円墳と考えられ、国分寺台の台地上に所在する円丘系古墳では所属時期の明らかでない諏訪台十号墳に次ぐ規模を有している。出土埴輪には川西B種ヨコハケ使用の埴輪も存在することが指摘されるが、大半は1次調整のままの3条4段構成である。また内部施設の一つからは変形獣文鏡が出土している。所属時期は出土須恵器からTK23～47と報告されている。

南向原四号墳は、国分寺台地のやや奥まった小谷に面した台地上に所在し、直径24.8mを測

る円墳である。出土埴輪には、円筒形・壺形・人物・馬形等の形象埴輪も多数ある。埋葬施設は一基を確認し、鉄鏃1点・刀子1点を出土している。他に須恵器碌・土師器坏等があり、出土遺物から持塚一号墳とほぼ同時期と考えられている。

西谷十号墳は、国分寺台地の北西部台地縁辺の、前期古墳4基・後期～終末期15基から成る古墳群中に所在する、直径19.2mの円墳である。埴輪は円筒形埴輪で、2条3段の最下段幅が器高のほぼ2分の1を占める、突帯は三角形化に近づく特徴を有している。主体部から鍔縁に銀象眼のある太刀・馬具を副葬している。築造時期は六世紀前半と指摘されている。

根田(代)一号墳は、国分寺台遺跡群中最西端の海岸平野を見下ろす台地上に所在し、御産目浅間神社古墳とは、0.7kmの近距離にある。全長24.5mの帆立貝形の墳形を呈している。埋葬施設は、中央・前方部の他2基が存在する。中央施設からは銀胎金塗金耳環2・直刀2・鉄鏃・馬具等が出土している。埴輪は墳頂部と中段の2列を検出し、突帯の断面は完全に三角形化したものが主体的である。他の出土品にはU字鋤先・土師器高坏・須恵器坏類などがあり、築造時期はTK43期としている。

山倉一号墳は、国分寺台南東端の養老川を見下ろす河口域最深部の台地上に位置し、前方後円1・円墳3・帆立貝式1・方墳2の計7基からなり、一号墳は古墳群中最大の全長45mを測る前方後円墳である。埋葬施設は、横穴式石室である。出土埴輪には、円筒形・人物・鬚形・馬形・鳥形・太刀形が存在する。円筒埴輪は、2条3段の最下段幅が高さの2分の1を占めるものである。

君塚天神山古墳は、御産目浅間神社古墳の北1.5kmの海岸平野の標高3～4mの低地に所在する。周辺は市街化が進み改変が著しく墳形は不明であるが、残存部で径23mを測る。出土埴輪は表彩資料として紹介され、3条4段の最下段の狭い下総型の埴輪として理解されるものである。所属時期に関しては、山倉一号古墳よりも新相の感があると指摘している。

御産目浅間神社古墳の出土埴輪については本分中で大村が詳細に述べているとおり、円筒埴輪には2条3段と3条4段の2種類の普通円筒埴輪の存在が数値復元によっても明らかになった。ハケ調整は一次調整のみで、突帯は稜線を明瞭に残すものが多数を占める。このことから御産目浅間神社古墳出土埴輪の製作時期は、養老川河口右岸の国分寺台周辺の小地域に限定すると、南向原四号墳と西谷十号墳の間を埋める資料として注目できる。

周溝内出土土器の1～38は、奈良～平安時代の遺物であり、1～5の須恵器坏は永田・不入もしくは石川窯産と考えるのが最良で、6～10の須恵器坏は、国分寺台地上では客観的な感のある遺物であり、南河原坂産とも考えられる。いずれも八世紀末～九世紀前半の所産であろうか。11・12は、底体部とも手持ちへう削りを施す土師器坏で八世紀末～九世紀初頭である。これら1～23の奈良～平安時代の土器は、一見時期差があると考えられるが、1～5の須恵器坏

と同様な製作年代を与えて差し支えないであろう。

こうした奈良～平安時代の日用雑器を中心とした土器の出土は、当時この地域に集落が存在したことを示し、出土土器中には国分寺台では客体的な遺物とされる上総北部産の須恵器が多くあり、国分二寺の所在する台地上集落とは顕著な差を示している。このような状況は、国分寺台地上の当時の集落が国分寺造営に関わる集団の集落としての存在意義を一層印象付けるものである。したがって、御座目浅間神社古墳周溝内から出土した八世紀末～九世紀前半の土器が、当時の当地域での日用雑器の普遍的な在り方なのかもしれない。



御蔭目浅間神社古墳周辺の航空写真

図版 2



御座目浅間神社古墳遠景(中央の立木):北西から(1985年7月)



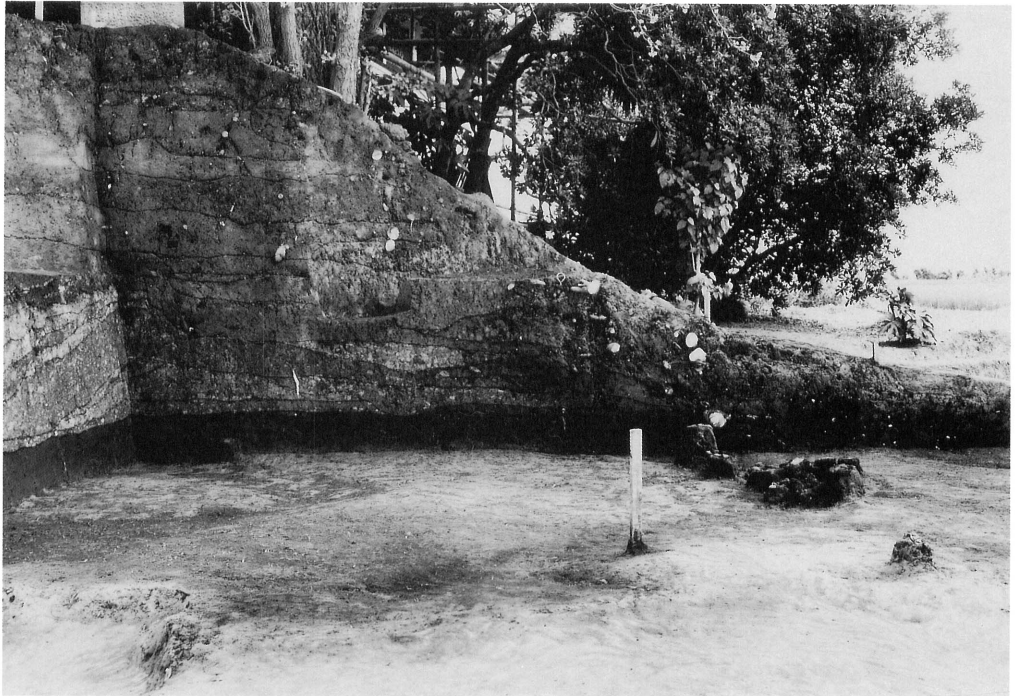
調査前の遺跡近景



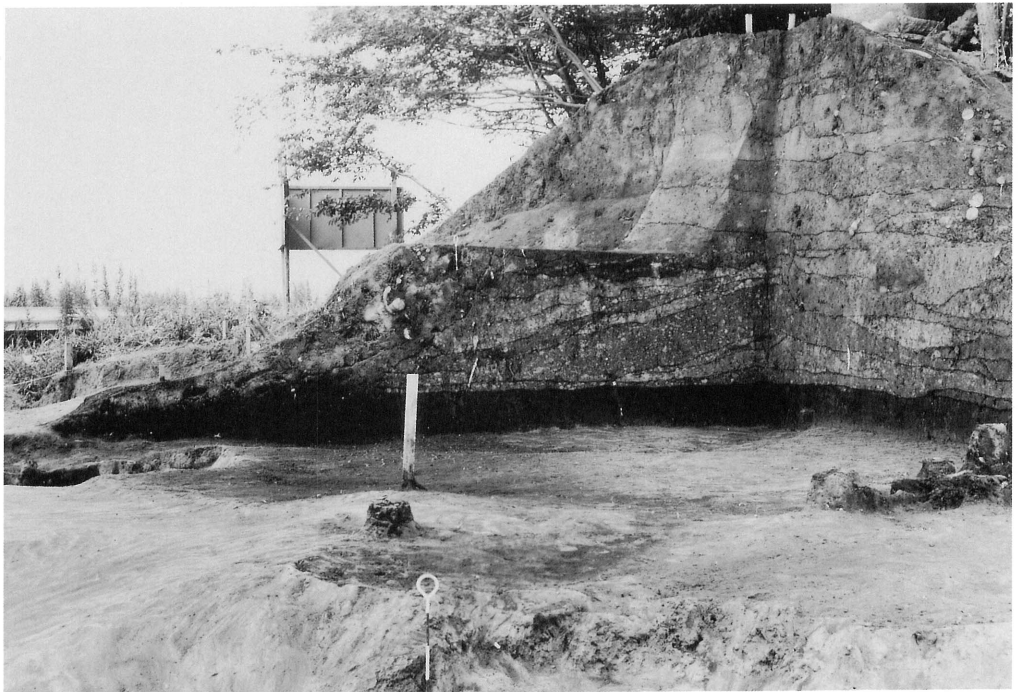
調査前の御座目浅間神社古墳



周溝調査後の御座目浅間神社古墳



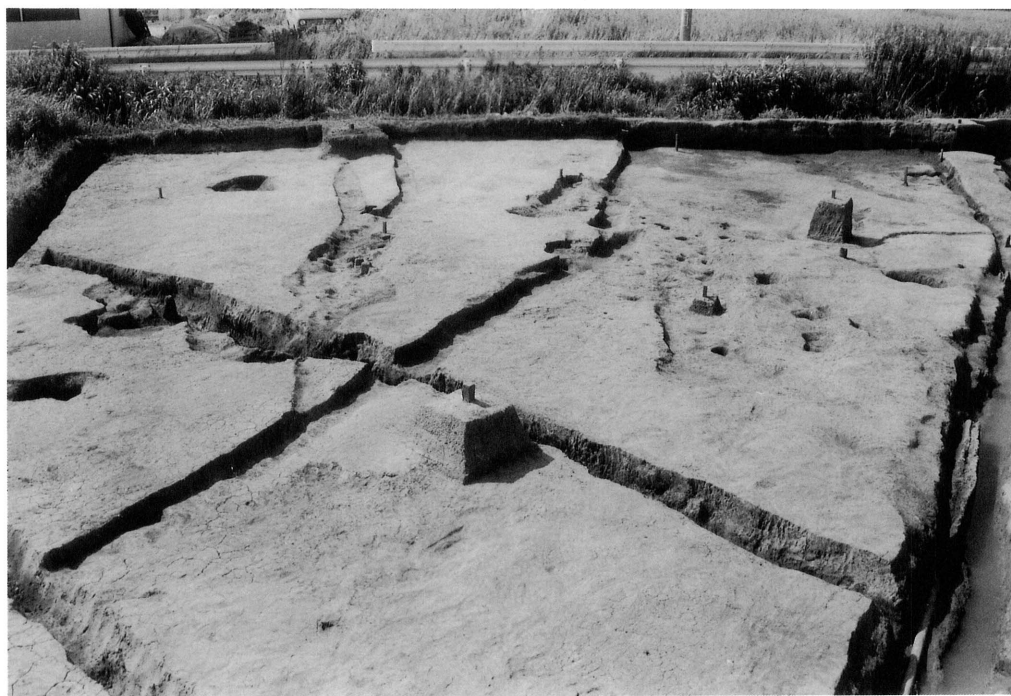
古墳盛り土状況



古墳盛り土状況



古墳と埴輪出土状況



西側調査区



土層と埴輪出土状況



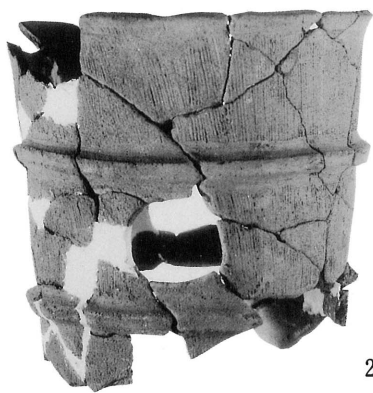
前方部埴輪出土状況



1



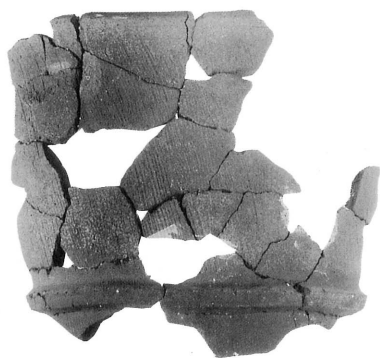
3



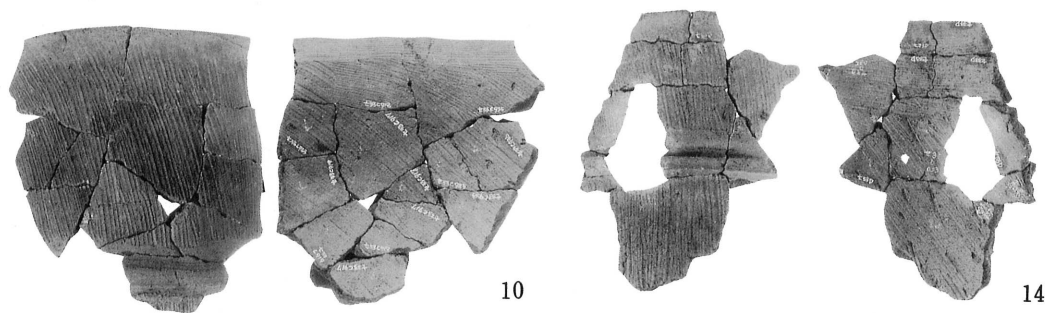
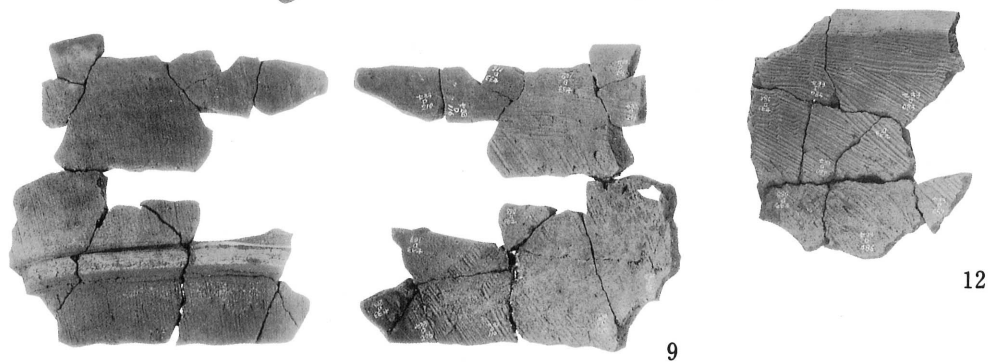
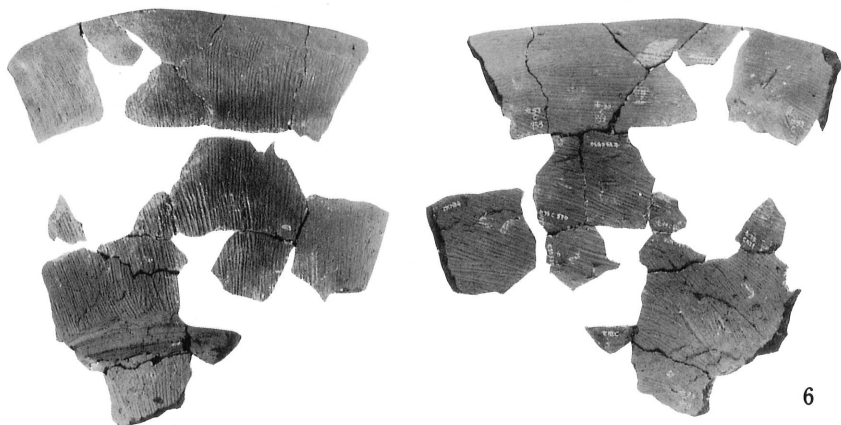
2



7



4





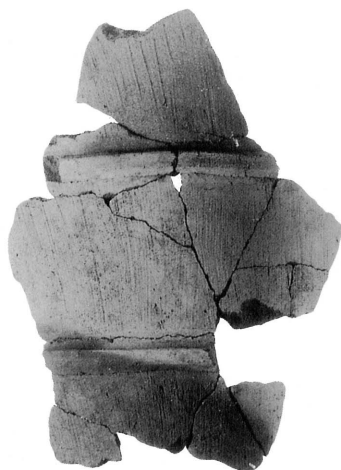
11



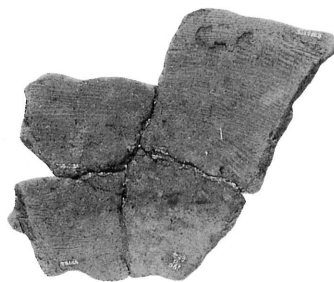
15



29



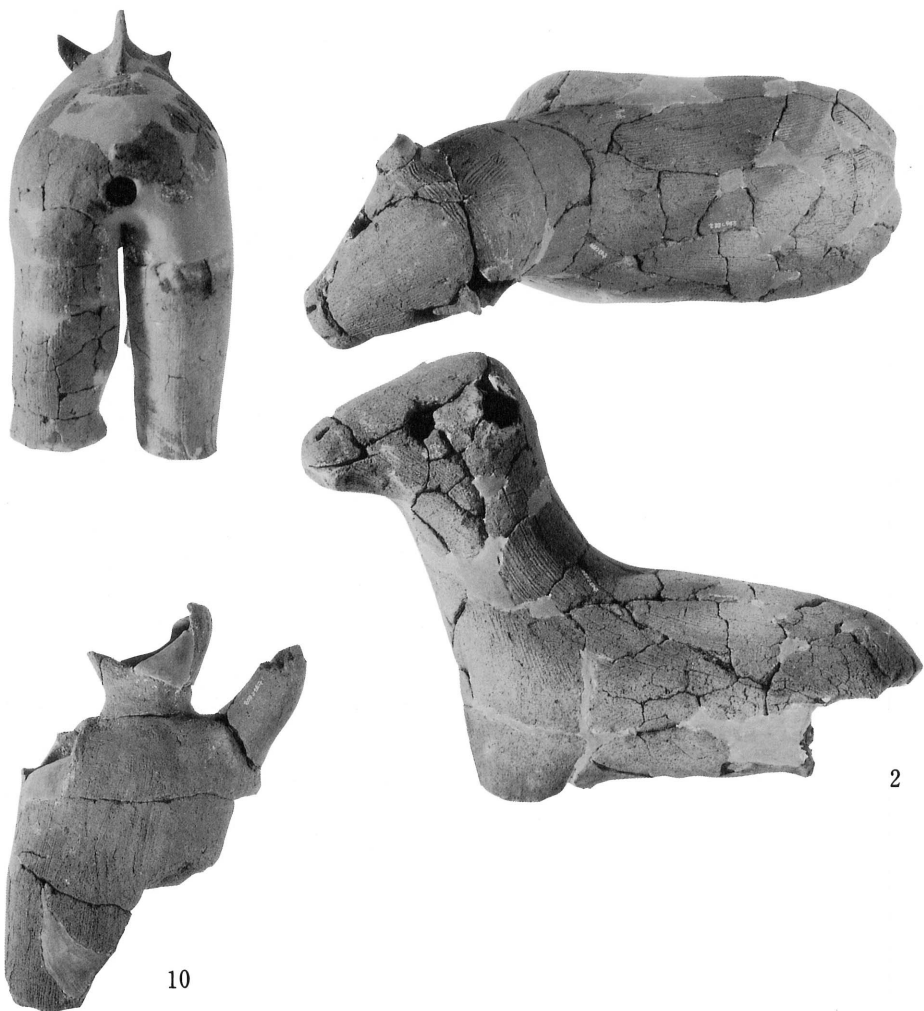
17



16



1



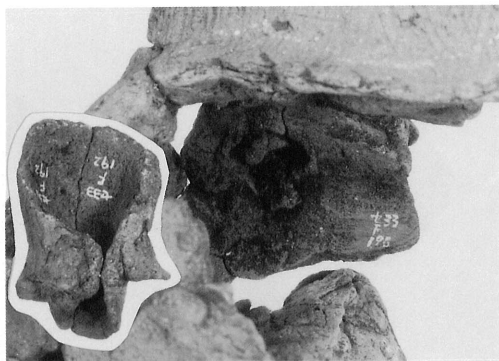
2

10

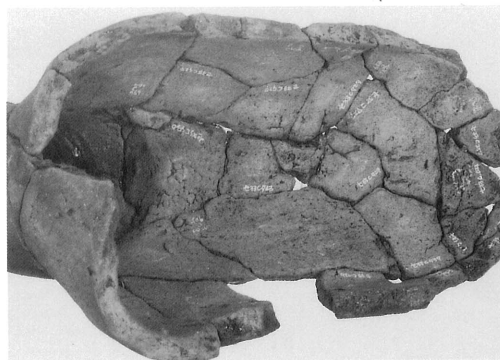
図版11



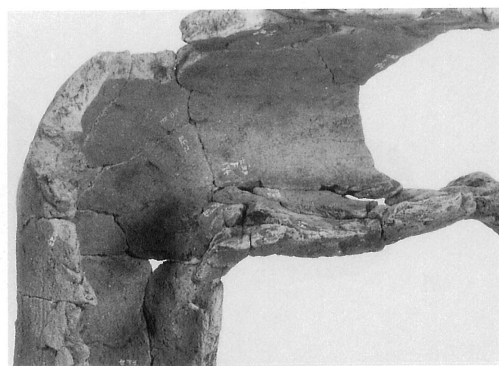
猪形埴輪(1)頸部内面



猪形埴輪(1)耳・耳挿入穴



鹿形埴輪(2)胴部内面



鹿形埴輪(2)胴・脚部接合部



3



4



6

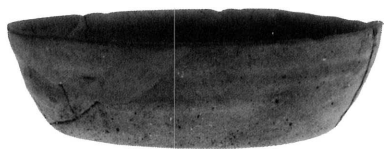


8

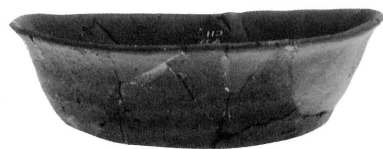


9

图版13



1



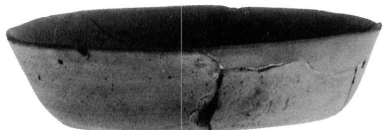
8



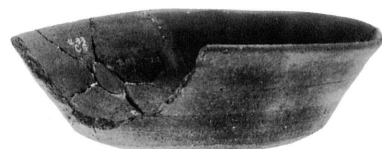
2



9



3



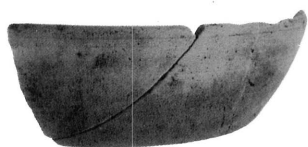
10



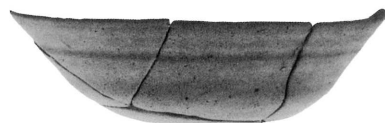
4



11



5



12



6



13



7



14



15



16



17



18



19



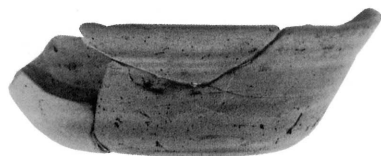
20



21



22

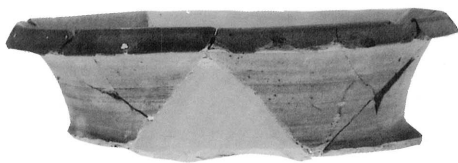


23



24

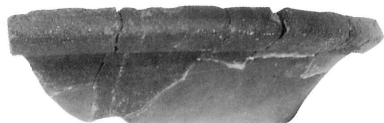
图版15



25



34



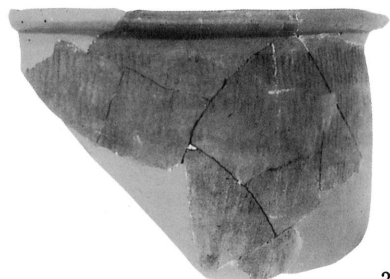
26



35



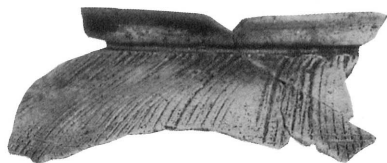
30



37



36



43

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第21集

—— 千葉県市原市 ——

御蔭目浅間神社古墳

昭和62年3月 印刷

昭和62年3月31日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 財団法人 市原市文化財センター
〒290-02 千葉県市原市馬立817番地
Tel. 0436(95)2755

印 刷 株式会社 国際技報舎市原営業所
〒290 市原市惣社867-18
Tel. 0436(21)2355